源氏目案 上 いよも ちまで

Genji meyasu [v. 1]

" [Kyoto, 1654?]

PL788
4
.G43G326
1654
vol. 1
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551303

一花鳥序云。あづまの国もろくのうけいはれくうへにを記。
紫を茅の色の中にゐるこゝろかゞとし。これもとかゝき
水ハくめどもさらにはたくるとなく。くらくなるさ玉に。
見がけじいよく光をます。我国の玉寶も源氏物語
にゐるさらはなるべし。これにまゐそ。せくのもてあそび
抱となりて。花鳥の情をあらはし。家々の注釋まち
まちにして。雪蛍の功をつむといへども。行がしれおとぐ
の河海抄ハいまし今をかむがへかゝきあらはをまつ
てゐ。もとも抄中のむねにゐるひて。指南の道をえ
たり。しかはあれど。筆の海にもとなどりてあらはれたる
奥をしり。詞の林にまぶしてくいぎ成まゐ兎にあへ

ア。のうれる後ひろひあやまち後あしくもちゐは先達の
しるしざまそこむかざれば後生のこゝもがらなんぞしるくも
ざらんやつねは愚眼のせらぶ取後筆舌にのべて鵜鳥
餘情と名づくるところしるなり
宇治の大納言物語云。今はむかし越前守為時とてざえる。
世まめでたくやさしかりける人はむらさ紀或アがおやや
この為時源氏はいくりたるなりこ後かなかことぐを
せむもとめまかせたりけるとぞきたいの家このこと後
ゆ召てむもとめ後めしいざしたりける此源氏はくる
たることさ後くまゝつたへたりさいりてのちつくる
たるともゆいうれかまことなるらん

一 順徳院御記 建久二年 一切物語雖多或有道或詑変也併物
語ハ詞指事あるけれど、さも上手めかさぬ詞殊勝也。大和ハ無下
ニ劣。其外無何物語。盡も不見無其詮之者也。源氏物語ハ
不可説物也。更非俗人之所為。紫式部書之。始一條院有仰
云、不可説物也。式部ハ日本記をこそうかべられと
仰下。于時左衛門内侍妬之論言号日本記御局云々。誠
諸道諸芸皆縮此一篇。不可説未曽有。下説源氏哥ハ
劣也。狭衣哥こそ能よまれたれと云人もありと云。此条心浮浅猿
事也。更非同日論議。狭衣哥もかく不悪ハあれども、源氏
哥ニ不可及事雲泥也。凡哥道ハ知与不知水火者也。源氏
ハ才ニまさり詞つゞき、非人之所為。不可説事也。才ニ哥秀

迯是又何人及之哉三作者也以虚玄尽優美色之事ともるべし・但殊見所又不可説也・但是ハ我朝究上也・
詞ハ更非人之所為物也・末知子細之輩不可弁是非凡
古今・後撰為大意時ハ則一条院比とぞへり・非ず非叢
通物歟

一 河海序云・光源氏ハ寛弘一条院のはじめに出来て康和堀河院のすゑにひろまりけり・略之

一 同抄にいふ・此ものがたりのおこり・説々ありといへども西宮左大臣・安和二年太宰権帥に左遷せられ給しかバ藤式部のおさなくよりなれたてまつりておもひなげきける比・大斎院選子内親王村上女十宮より上東門院へめづらかなる草子

やもべるとこゝろ申させ給けるにうつか竹とり猶
の古物語にめるれられば、おもしくしくしてくらいぞして
こそまつるべきよし、或ゟにおほせられれば、石山寺
に通夜して、このこと紙いのりゟにおりしも八月十
五夜の月、湖水にうつり、心のすゝまゝるまゝに、物語ま風
情宮にうりひける紙、ますれぬさ紀にとて、仏前可
ありける大般若の料紙を本当にゟうけて、まづまち海
ありしの夜巻をうきとゞめ望る、是によりて沈ゞの巻
にこよひは十五夜なりけりとおぼしいでゝと侍りとや、
後に罪障懺悔のこゝろに、般若一ア六百巻をこゝろ
うきて奉納しけり、いまにかれ寺にありと云ふ、光源氏を

右大臣にあるぞしへ。紫上の式アが身によそへて。周公
且白居易の右の如かんがへ。左納言菅並相のゝあしを引
て。かき出しけるなるべし。そのゝち次第に書加て。十
四拈になして。こそまつりし代。權大納言行成に清書
をきをられて。象院へまいらせられけるに。法成寺入道
開白奥書を加られて云。此物語。世皆式アが作とのゝしへり。
老比丘筆を加るところ也と云々。誠に君臣の交仁義乃
有。好色の媒菩提の縁にいたるまで。是をのまずといふ
ことなし。其をもむき。莊子の寓言におなじこさもれか。
詞の妖艶さらに比類なし。一アの中に紫上の事をもと
られてかきのぞくなるに。数式アの名をあらためて紫

式アと号をしれかり。一説云。教式アの名幽玄なるべ
とて。後に教のたれのゆりに紫の字にあらしめ
らると云ふ。或説云。一条院のれめれとこの子也。上東門院
へまいらせらるゝとて。我ゆゑのもれなりおもれとや。
百とアさせ給けるによりて。此名あり。武蔵野志
義なるとともいへり

一物語の時代ハ。醍醐。朱雀。村上。三代に准ずる歟。桐壷れ門也。
延喜。朱雀院ハ。天慶。冷泉院ハ天暦。光源氏ハ西宮左大臣。
如此お尚するや

一照宣公の母ハ。寛平法皇の皇女。延喜の帝のれ妹也。致仕大
臣の母も。桐壷れ門の一れ腹とあり。此外其他おほし雖者

云心前の准授誠ならせありといへども此抽説ハ光源氏
をむねとす法歟されば西家左大臣ハ准ずること一世の
源氏左遷の説ハ相同しかれども彼云好色の先達とハ
さしてこそこそざるなるや今の抽説ハ殊ハ此道をむとし
たる歟答曰法たりまれがたりのなしひ大綱ハ其人乃
おもかげあれども行説をきそもあるがゆへにとく
まかれを損することなし漢朝の書籍春秋史記な
といふ実録にもかゝ有二異同一歟

一桐壺帝冷泉院を延喜天暦にあるずしへをあるがし或を
唐の玄宗のかるれたりしをひき或ハ秦始皇のかくれ
たる例をうつきり又天慶の門ハ相續の皇胤おりしまき

ねども此もれがたりには、朱雀院の御子今上、冷泉院の
御後なし（或説曰此条有作者意趣歟云々）光源氏をも安和の左府に比せと
いへども、好色のたゞは道の先達なりゆへに、在中将の
風をまねびて、五條、二条の后を薄雲の女院勝月和の
尚侍によそへ、或はかたのくか将のそしりをおもへり、又
太上天皇の尊号も漢家には太公の旧躅、本朝には草
壁王子ホ先蹤を摸せり歟、是作物語の習也、そしめに
いづれの御時にかとて、分明に書あらはさぐ事も此要也、
色去下には延喜の御時と云心をかくめり、此外或参
桓武一条院を桐壷御門に准じ、又内大臣伊周公を光源
氏に擬せるといふ一義もあり歟、皆以謬説也、若桓武

といふべし其以後の帝王陽成宇多延喜の代名物語に
あり一条院ならば延喜より後の代の事にしぞ其
上次戸巻に此比上手にすめり千枝つねのりとも云
人朱雀村上の代世の畫士也此比と云ひ一条院まで存
生をず又絵合の巻に朱雀院を当代の由載無異論事
一此物語説本一やうならざる歟行成卿自筆の本も悉今世
に傳ひ源光行ハ八本をもて挿合取捨して家本とせ
ひ所謂二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河左大臣後
房本号黄表紙左大臣筆記従一位麗子本土御門右大臣女号京極北政所法性寺開白本唐紙小双子号尚侍殿本
又条三位俊成本京極中納言定家本号青表紙等也各雖證本皆
有異同我勘合古本且可加了見者耶善者從之奉之義也

一黄表紙 後成ハ青表紙 定家ハ二条家用ニ奥入計ニてよむ也
已達所為也云々為相母 阿佛 為氏継母也奥入を切て渡ニ家
也或説奥入ハ伊行ハ作也それは定家ハ住を加ふと云々
一河内本河内寺大監物源光行八本を以て挍合取捨して
家の本とす清ちなり
一紫式ア 母常陸介 摂津守 藤原為信女
上東門院女房 或鷹司殿女房

内舎人 勧修寺家祖
良門 閑院左大臣冬嗣公六男
利基 左中将 ― 兼輔 堤中納言 ― 惟正 刑ア大輔 ― 為時 正五下越前守 ― 紫式ア
高藤 勧修寺内大臣 ― 兼茂 ― 女子

此式アハ後ニ左清ハ撰佐宣孝ニ嫁して大貳三位弁為 挍衣
佐者を生ぞ。旧説ハ正親町以南京極西頬今東小院向也。此

院ハ上東門院御所之詔也。又式ノ墓所在雲林院白毫院
南小野皇墓の西なるを

一源氏をこゝろに心をとゞしまゝ。盛者必衰の心を守て見。悪
き得ては好女のゝるにいたゞきしにかゝるゝ。源氏をば紙
なしひて見云々

一凡五十四帖の巻名に四の意あるを。一には詞をとり。二に
は哥をとる。三には詞と哥とれ二をとり。四には哥に
も詞にもなきことも紙名ともなる。天台の教に四諦法門を
一には空門。二には空門。三には亦有亦空門。四には非有非
空門也。一切の云教ハ此四諦に出ぞ。これによるゝて故四
諦外別立法性とも尺をなる。真實の道理ハ云教の得ゝ

まおるべきもれなり

一一巻桐壺　詞を名とする

桐壺ハ淑景舎也。此所曹司よりて光源氏の母御息所を。桐壺更衣といふ。仍巻の名とせり。一名壺前栽。詞にれまへのつゞせんざいの盛なりとあり

二巻箒木　うしろを名とする

はゝきゞの心をしらでその原の道にしやなく雨ぞひぬるかれ

并一空蟬　縦のならびや。哥を名とする

空蟬のうしろへてげるまれなる人がられなりしこゝれ

巻の并のことハうつゝの地語第三の并。春日祭。又

第五吹上巻再祭使菊宴なるどあり。演松のもれがたりにも并

一怙あり。此木の例歟。凡并の様。一偏に同時のことく
もしらず。横縦ある。同はじき紙分るもあり。是を縦
并と云。空蟬の巻是なり。うつか演松ハ横也。末摘
も縦横ね更なるなり

并二夕顔 縦のなるべ也。哥と詞と紙名とをなり
心あてにそれかとぞうら白露の光そへうゆふがかのそれ

三若紫 哥を名とをり。若紫とつゞき多体詞ハしらず
あまつうていはしらもしん紫のねよりひろのべのまくさ

并末摘 横縦のなるべなり哥を名とをなり
なつしきをとはなしにあるこれ末摘 花を袖にふれ々番

四紅葉賀 詞を名とをなり

但此巻は紅葉架とつゞきたる詞は見えず。葉のくんの巻は
此紅葉架とあるは。荷裏（ふぢのうらだ）葉の巻にもこしたる

五 菊宴（ちなのえん） 詞を名とせる

南夏（なんでん）のさくらのえんをさを結ふと行る

六 葵（あふひ） うたを名とせる

はかるしや人のかぎをもあふひゆへ神（かみ）のまつしれふと行けり

七 榊（さかき） 哥ことばを名とせる

神がきはしるし此杉（すぎ）もなき物をいかまがへ言おれりさらなよぞ

八 菊散星（ちならのさと） うたを名とせる

こゝ此菊乃ゆゑなりしこ時鳥なれちる星を郡（ち）ねて言ぐりとしか

九 次戸（すま） 哥と詞（ことば）を名とせる

松志まれあまれ笠やもいかるらんすまれうしゞ人志用こゝろ

十 明石 哥とことばを名とをつる

なげきつゝ明石の浦に鮎雪のこゝやと人をおもひやなかれ

十一 澪漂 うゝ女後名とをつる

こゝ後げくしこゝろ志るしまこゝまでもめぐりあひけるえにハかしな

并一 蓮生 横のなしびや哥と詞を名とをつる

ぢ

君れ家も我こそといめみちもなくかきこもれもとの心を

并二 関屋 縦のなしびや詞を名とをつる

関屋よりもぢとくづれ出てうこひすぐるどもとあり

十二 繪合 詞を名とをつる

此巻に絵合と法ぐきこゝろ詞をなけ是どこけとり乃

おきれにうつ月のとしかげをあらせ事ぞあり。れ
めしの詞あり。後拾遺集の詞に正子内親王絃合の夏とくらり

十三 春風 哥と詞を名とせる

身をかへて独人ゐる春にきくしにくる松かぜぞかく

十四 薄雲 哥を名とせる

入日さす峯にたれびく薄雲はもれさふ袖にくらやまぶへ海

十五 槿 哥とことばを名とせり

うしおりの家わきられぬ槿の花乃さかりはすぎやしぬらせ

十六 乙女 哥と詞を名とせり

乙女子も神さびぬらして清袖ふるき世のともよそへぬれば

十七 玉鬘 哥を名とせる

恋わたる身はそれなれど玉がしいなるすぢを見るこそあるん

并一初音縦のなしびや。哥と詞を名とする

手月を払はひかれてふる人はなふ鶯のそのしさうせもち

并二胡蝶縦のなしびや。哥と詞を名とする

茎ぞのこそふとさへやもろ草に秋まつ虫はうらくこるし番

并三蛍縦のなしびや。哥と詞と紙名とする

声はきで身をのこゝが寸蛍とそいふよりまさるもひなるもめ

并四常夜縦のなしびや。哥と詞と紙名とする

なでしこれとこなつしきるをばもとれきねを人や見るゆん

并五蒔火縦のなしびや。哥と詞と紙名とする

蒔火はふ地そふ恋のそふりとそ世まはこえきぬかの目吹かれ

并六 壁分（のりき） 縦のなしびや。詞を名ときは
壁分例（れい）のとしよりもとあり
并七 御幸（こゆき） 縦のなしびや。哥を名ときは
うちきしあさぐもりとしこゆきにはさやかに此光やはこし
并八 蘭（まちまうま） 縦のなしびや。哥と詞と紙名とせり
おなじの家にやつる蘭あれはかけよかごとづりこと
并九 桂（まきかしら） 縦のなしびや。哥を名ときり。或は桜（さくら）べと云ひ
今はとてやどれぬことなれきつつまきれしは我をこゝろな
十八 梅枝（むめうえ） 詞を名ときは
弁少将（べんのせうしやうひやうし）頼子とりて。按がえいでしたりいとおかしとあり
十九 藤裏葉（ふちのうらば） 詞を名ときり

荻のうしぐのとうちぎんじ　おくるとわり

二十　若葉上下　哥と詞と紙名ときり。或ハ此下巻をもちぐしとなり

小松原末のよもひにひかれてやのべの日かれもうしをつむ　俗ニ

廿一　柏木　哥と詞を名ときり

柏木に葉もりの神ハまきぎとも人なるすべき有の木ぶり

廿二　横笛　哥を名ときり

よこ笛のしらべいことにかりしぬを覚るしく如しねこそつきせね

并　鈴虫　縦のなしび也　哥と詞を名ときり

大かたの秋をばうしとしらしをかりすてがたく紀すぐ虫の声

廿三　夕霧　哥を名ときり

山里の哀をそふる夕ぎりに立いでんやもなきゆりして

廿四御法 哥を名とせり

しらぬべき御法なりぞとれまゝ世をまとむすふ中のちきりハ

廿五幻 哥を名とせり

大宅とりよふ幻美まゝに見しうゐ玉の山清しらせら

廿六雲隠

此巻ハ名のゝありて、まゝ詞ハなし白家の巻よひかりく

れ給し後こゝにまてしるべき歟。雲かくれハ逝去をいへ事こ

と也。万葉神亀六年。左大臣長屋王賜死うく後作哥

万三ス六ヒ

太皇のことゝ申しことおほあらざれ時なほあらねど雲がくれまゝ歟

此外不可勝計。宿木の巻ハ六条院世をそむき給ふ。二三

年ばかりさぶれ院ハ隠居志給へ事由をしられハ此巻乃中

ま二三年隠居し給てそのゝち崩れしのふと紙此巻ま詞
わらはしるべきも柳巻の名ぢうまて詞をしぬことハ天台
の宮教の法門を例ま引されども紙地どをさ心ちし給り此
菊島まくりしくまつし給也此巻ま八九年のことこまれるなり
廿七白宮 詞を名ごきり或ハ白芳門也一名薫中将也
例の世人ハ白芳門薫中将ごまくにくりひづくてごあり
并一紅梅 縦のまくらび也 詞を名ごせり
東のほまま形らき紅梅のいとおもしろくごあり
并二竹河 横の并也来ハ縦也 并ご詞ご紙名ごとなり
竹河のくしうちさし一ふしまるま心のそこハしりきや
廿八橋姫 宇治十姑 哥を名ごとり

廿八橋姫 十帖哥を名とせり

はし姫の心をくみてたかせさす棹の雫に袖ぞぬれぬる

廿九 椎本(しゐがもと) 哥を名とせり

立よらんかげとたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな

三十 総角(あげまき) うたのことばを名とせり

あげまきに長き契りを結びこめおなじ所によりもあはなん

卅一 早蕨(さわらび) うたのことばを名とせり

この春はたれにか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわらび

卅二 寄木(やどりき) 哥を名とせり 或一名貞鳥(ていとう)

やどりきと思ひ出ずは木のもとの旅ねもいかにさびしからまし

卅三 東屋(あづまや) 哥を名とせり

さしとむるむぐらやしげきあづまやのあまりほどふる雨そゝぎかな

卅四 浮舟(うきふね) 哥を名とせり

たち花の小嶋(こじま)ハいろもかハらじを此うき舟ぞ行衛(ゆくゑ)しられぬ

卅五 蜻蛉(かげろふ) うたとしたる詞を名とせり

ありとみて手にハとられず見れハ又ゆくゑもしらず消し蜻蛉

卅六 手習(てならひ) ことばを名とせり

てならひといふことば四ケ所あり

卅七 夢浮橋(ゆめのうきはし)

花鳥(くわてう)ニ云ば此巻の名ハ哥にも詞にもみえざることなり。

一ツ名目也。定句ニ料簡(れうけん)してもてニ叙(じよ)しとりぬ。

うきはしハ古哥の詞ニ世中ハ夢のわたりのうき橋

とよみたるかとかみたる夢のうきはしと流ゞ書けり

源氏目案巻第一

い

一いづれの御時にか　此發端の辞甚深也。先作者とおもはれき
ぞ。男つくへさるやうに書たり。巻々は始終にも是趣あり。
傍人の難をおもんぱかる故也。延喜の御門の御時の宴也。仰勢集
の始にも。いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ける。此詞をとられ
一いさ　寔也
桐壺の更衣の母うへをさめたる心也。よしあるは嫉妬也
一いたしなく　早晩也。しは助語　一いさめ　諫也　禁制の心
一いとゞいとゞ　つゝまし心也　一いとゞいとゞの心也
一いとゞいとゞ　ほめたる詞也。又忌也。可ようとゝの心うべし。

一いとへ答(こえ)也 いとふとも
花鳥おもひやうなしかぐも也
をおもひ心也
一いたくか 聊(いさゝか)也
雲の上人(くもゐひと)とは男女(なんまま)なり 昇殿(せうでん)の人をば云也
一いとも如こき 寔(まことも)(かくしけなき)也
一いせ浮くゆきよりまをかへる 異之哥(つくゆきうた) 未勘(いまさんえ)
伊勢集
玉すだれあらうもしらでねし抱は美にもこじとひけなれ
一ゐてとてまつる 奉将(そまつるゐて)也
さ比ゐして地光の神也
一いとしきまゝ いとけなきとは 僻(ひかつと)夏也 いとゝきなきといふべし
一いとゝ如くおもふ ゐへましかば
一いぶせき心もとなき心也 いぶし
一いまけなれ 幼稚(ヨウチ)也
一いとゞしく 弥(いよく)也 ぢくは 助(シヨコ)語也
一いまさらに 今将(イマハタ)也
一ゐたちおほしいとなき 居立(ゐたち)也
一いしなそく 倚子(いす)也

為家の説。初もとゆひとは。加冠人のあふまよりて也。勢なる心と
も。宮服の此女を。源氏にはそひぶしまとれ心也

一 いさほひ 勢也

一 ゑ六日 いつかむいかどよむべし

一 いとなミ 雑営

一 池の心ひろく 池底也

一 いひけれぬふ 世ましき名さくなの得まれある人をも。世上に
いひけつなしひ也

一 ゑこの紙なる文 音ハ色紙に
艶書をかさしと也

一 いまはさくしれまもよしし 三男唯一心万法唯識の心也

一 いひそし 法らくいふ心也 言穀いひしろもほどく云心也

一 いひしろひ 平にいひさる様也 引しろふなどいへることし

一 いへぢとおもはんかた 馬以が前に女を遠ざりて後ハ定ろ妻なるさ也

一いまめかたり物の声 管絃も世にしよりつたへきたりは先づ
らしかしず今様にめづらしきものいでくるなり

一いさや ふ氣なるを

一いよれ女 伊与守を女といへる
度長官も次官も職掌はおなじきなり諸國守闕乃時も
女長官の度を執行也なにかよりして守を女とも云へり

一いもうと 系屬にはおれにてもあれ女をば男の末にうく法也
古今の序にすさのをの尊を天照れ神のこれかことといへり

一いざるなりけり 人のねごいことは云也

一いぢら俗にどりやと云心

一いむ 忌也きらふことも

一いでけるびはまけにそるを うつきこのまけぬべし

一いられゆげるも 伊与女住にわか時なり面白書なきり

一いとなくいとまなきや
一いさいざよひ人をさそふや
いさよひと云も夕の山の端にやすらひて出るおそや げに入がたくもやすらふや
冊
一いなへもいなへまもあふまじきされ落葉(らくやく)や
一いぬるもれついはぬもれぞやいれうふや
一いきかれもかれや
あるり
一いぬかき 犬公(いぬぎみ) 昔ハ女子をおてざらしざともなどいへり
一いぬる十日 去(いぬ)る十日也
ふゐどきてぬかうと、おしまるまづむハ源氏の我身をさして
かるいのふあるり泥(なづむ)えなしめハぬぐなしれくろなるなり
一いむことあるし 受戒(じゆかい)あるころや
一いさよふ月やさよふや 十六夜也
一いへばと 鴿(いへばと) 本草ニ云 頭(クビ)短(ミジカ)ク一徧(？)色
一いろしうし 心にしくき心也
冊
一いそけなき ゝづの一声(こゑ)ハ鶯乃

一いきりしちそふ心也 卒(いき)

一いなびいやといふ心也

多辱(シハギ)

一いまやういろのえゆうすましう 花 今案(えんあん)今やうなことハ紅梅のこ
ちら云也 多こんばちき紅まもあらず又紅梅まもうらぬ
これなまて此江出来たるなるれバ今様なといへり大略(ほぼ)ゆるし
なと同しさ也 えゆうすましうは紅のこ紀なるよりうれだ
禁(きんぎ)なるは似(に)たりたるよりて云也

一いもをいもうとゝせうと云也

伴奉諾(いさなき)伴奉冊(いきなきのえしくきやうぶいちゝ)兄弟初て史婦(ちうふ)と成(なり)しよりて史姫
をいもせといふなるを

一いへの子(もみちのう) 良家子(ほうけのこ)也 種性(しゆじやう)なる紀
人ぬべし 拵家(せうけ)以下上臈(しらう)の家(いへ)也

一いうそく 有職也 又右族也 一一院 寛平法皇ならずしかべし

一いかさ所 此世ま子供そへらり 令婦が明へしも同

一いこじき道ちからこそ 後の世の名のこしといへら

一いづれそこ 小ぢくが原ま風もそかけこは家のやどりともと

めらしまふべきいまれなる

一いたれいつきうづく心也 一一条おほち一条を西へり給也

一いきすぐ所 生霊也 又ならず 昊のこと也

一いちまやき 早速すこやかなこころなる

一ゐんかうぞ 掩韻 古詩の字をふこぎ字 下句の末字を何ノ

文字ご推して 勝負とらふ也

一院のおもかおがき 何ありとこしず 栄花物語ま岩伝と云取れ廟の

と 皇 松崎のおく 敎 天暦陵を心よきて言ふなり

一 哥 いけり又 春のうやこ代 東宮に比すなり

一 おし いろくのうてぐら 青幣 白幣 日本記 又五色幣あり

一 家をもちれ 雖家 三西月 落涙百千行

一 いつくのにぐり 此渭也 一石山 聖武天皇御宮 金鷲仙

人 建立 云々 一いろくのおとのつきぐしき

ぬひ抱くるぞめ 將禎ハぬひ抱をもくる深をもすなり

一 志合 いましめて かくくにがくめるぐすなり

一 哥 松風 いくりへり 張騫漢武帝使ごして楫に乘て天漢の源を究

ごして 孟律にいくりて 午女に遣て御しをしひてよめり

一 哥 いさしゐる 小井 日本記 もとのおとしは尼君をさしてのみなり

一 一世の源氏　源氏と知てゐる也。一世の源氏と云也。一世源氏
任官已後。即位例　光仁天皇。元大納言。此外多略ス
一 いまひとりの給さしつ　夜つゞのことも一説私好に心をかけ給也
一 いさりをし　いさりとは海にて魚を乞食也。我身のうさことしたる
ひさゝろこ也。鵜舟のかゞ里と海士のいさりぐるまゞへ海なるを
一 いびき　鼾睡
一 家よりかまもとめたる　備衣也
一 いかしへを　礼楽とよくうつされたると。尚代を祝めへり
一 いうりは　一向也
一 いたゞき給はるれたる日出先
一 いかゞ仏のれ玉　極楽海士を云
一 いはも玉の光とこゝめ給　衆人恐も如登春臺　註恐和也
一 いまめれたるすそごれ事　末濃とは此事れたるびら上ハ白く

すそは紫或は紺に深き也　一つれづれしは心すごき　古今序
絃をひけるか女の事　一いはつゝあれなる人や　草子を作
ゐなか人を云歟　一いひもてゆくはひさけれは
般若沙汰の心に行含みして碎空碎破の空理にもとづく方等
ましても空諸乱をしれを今畢竟皆空と説て彼等の機をゆり
ころへても空下念の法ともとと与へあふ是をつひもてゆけハひと
けれはと云へれ也文般若にゆるしず方法一如の心にと云々
一つゝかし　鯉　一家のいとなまずして　常侍にいハ家
高くて家づくりのことは心はいわれ人をハ古より定まりとや
一いそしくいそかしくの心也　一いもせ山　哥　諸糸橋奥州也文をせう
よくしまどふ詞のしんや　一いるしん　哥　槇柱　三位より紫の色を風

ゆへに加階のことに成ぬ

一いやくしく敬心なるを

一いうきぬしうれ うるはしうきへ人かれと云心也

一家ばかきのぞむ 女三の家司を言と云事帝王女選二五乗人事也

一いきまき 言氣巻 息巻 めぐいぐしいかか 臭也

一いましへのるあし 濃瀬天皇世紙治治さうりに忠仁公をえらひ

事ゆ子をあつけ給事を云事それに女三家を准ずれ義也

一いのちとて 命ハ事もとも世の常に契りなれば契りハ毎まぐれ也

一いかなれば 鶯を源氏に比して猫を女三に比する也鶯も菅に孫ぬ物也

一いばしこれこし人 猫にて女三をさひ出していへり猫をさして云也

一いろふ 食めくころ也

一いまはとて さひハなる紙をふらはも

一いづれとか さしかへる清とぐ海

のこしんとるなり

まことの家のことを成べし。法ぬるはいつれも不安ものをとも

一 いはさるは女二の小堂にて今ハかくなるまし記爰れ世をかもさひ

さまずおもわしがとの給ひしとせひて夕雪れかくらこのへる明ぬ秋の

爰とは世の爰なるべし

一 いそれこそ古き報といふ心也

一 池の蓮時移受去。樂冬悲來。毎至春ニ日冬ニ夜。池蓮

夏開宮槐秋落 長恨哥偽

一 いはゞのなまじし女人身猶

有五障。一者不得作梵天王。二者帝釈。三者魔王。四者轉輪聖

王。五者佛身

一 いまもてこゝにやおりします心也

一 いまゝ日をへて還城来陵王を

あやふあんとは日の蓋れに撥して日を午にかきゑすと云事。

史記云普陽以戈迴落日

一 いらゞぞ宮祈也馬もぐ立心

一いろかりの浅茅　あさぢの色のかりをさして服者の袖をしひやるを
一そかけり　大恵の服衣也　一いぼくとり　まへの奇に寄へぐて、
ぞとまをまあらりて、寄こそ服者の家をとりめるを
一いをのごも　ごとハれの字也　一いぼそやもいろぞやなれど、その
字清ニあらず笑べし。其れ本に子をもたせるなり
一いませの森のよふこ鳥めいたり　人ぼてとあるを、人づてなるぞ
と云心に引へてうきたり。薫の中君に一夜逢ぬひしことへの給ひぬとや
一いたぼたる日をくらす　鎖日不必碁
一いたづ程に　昔もそとあひつれとも、無実度也。大恵もめしましとや
一いぼそぼ　今の本津川也。いぼそぼとも云り　崇神天皇挑戦の所也
一いたちれ侍らん　鮑ハ地をうるがふ物也。心やとく頼そうぐ。又心もと

ちやうをせいへうあげるとは。心もとちやうにせいりて事あるを

一いがたうめ　伊賀刀女(いがたうめ)や　中媒(なかだち)や　たうめとは狐(くつね)をいふなり

一いさとけ(うき舟)　夜(よ)ざとしと云心也　一いづくより　白雲(ちくも)のかゝる山とは

わらはさもとや　一家(いへ)にもえいらず　觸穢(しよくけがれ)にてや

一いさらもかれ練し波さ　真実(しんじつ)の穢(けがれ)にあらずして使(つかひ)すゝむる

一いきさき夜(てならひ)　いかくせさるど。世俗(せぞく)に云詞也。けさき心をいふすなや

一いりへの扇(あふぎ)　お室(いつへ)。うきやうにて　お室をさしてる也。冬(ふゆ)の扇(あふぎ)也

一いちの所色　摂政(セツセウ)関白(クワンバクノ)一所也

ろ

一ろくの物(まきつかれ)　禄物(ろくのもの)也　一ろくのからひつ　禄辛櫃(ろくのからひつ)

一六条わたり(ろくでうわたり)　御息所(みやすどころ)の事始(ことはじめ)て書出(かきいだ)すなり。古前坊(こぜんばう)の北の方(きたのかた)也。好色(すきもの)乃

中宮のれ母也

一六十巻といふ姫と 玄義 十巻

釋籤 十巻 文句 十巻 疏記 十巻 摩訶止観 十巻 弘決 十巻

一六位の中にも蔵人ハあ紙多 六位蔵人ハ麹塵の袍を着せる

と青多といふ。今も極臈の蔵人ハ着せるなり

六位すくを 六位冠者と云ふ。すくをハ丈姫の様りといへり

一六条院にくりまて 河原院を模するなり

一ろなう 無論也

一六条院よりも 花鳥委し 融云別

業也。陽成院ばしおりしましたよりも。宇治院と号せ。陽成

院の御後。宇多の御門御知ましくなり。朱雀院御門を称し

給ひ。其後六条左大臣雅信公の御ふりしを。長徳比御堂

関白。買得し給ひ。此物語に六条院よりとかくり。御所なりも

一六条院（あけまれ）にぞ　白家（ほしゑや）ハ内（うち）にも曹子（ざうし）あり二条院も里（さと）也。又六条院の内にも曹子をとそこしらへ　一六十僧のつき　大般若（ダイハンニヤ）轉讀（テントク）のためなるに七僧を六十僧の中にあるべし

ろうぎらし　喫哢（テウロウ）　ろうめろうさらしとあり

は

一はしたなき（きらつか）　無半（たしたなき）　非常（たしたなき）　多かくこりき心あるべきや　一依前（ヨル）ニ

一はなやか　聲華（えなやか）　一坊にも　東宮坊（とうぐうぼう）　職員令（しりくゐんれう）御門

まなしを給べきれ子を。東宮とも也

一はしたなめ　たしたなけにとも。たしたむる心　鬼鬼（たしたなめ）　日本記

一はりまれの夏　皇子（かうじ）三歳（さい）にて　袴着（くはき）の例（れい）。冷泉院　天暦（てんりやく）四年

七月廿三日。東宮（とうぐう）の時（とき）此外（かかれい）例多し女人のも同

一はうるき無理無墓いふひなきこころなるべし

一はさむき将寒肌とにこらてうむ説もあり膚の寒也

一はぐしうかいく安心　一はぐしまぬ門と更衣とれ

ことばいへらむぐしむハ養育の心也

一はひとなるべ校とうはさん　在天願作比翼鳥在地願作連

理枝　長恨哥

一はいぜん　陪膳也　四位殿上人

のすなお役といへり

一はぎ志なくてぐに　ひぐに乃

何聊むつし母志のおりしはしき時ハ皆人それこのふなお母志乃

なくてぐにまくこと給べきか今ハまぐこと給事あらじと云心歟べし

一はいしまらぬふ　親主以下充

一はうせ　博士

服の拜舞ハ清涼殿の東の庭まてれ前へ向家拜あり

一はしまがき　草筆のことにいへり

一はぶりぞ　不首　一はやうもとのことにもやう

といへり　音の事也　一はげミ　勵　念　無心也

一ばんしきでう　盤渉調ハ冬の調子なれバ打まあひて引ぬべし

一はうそくなり　傍側あらハなる心也　飽足　一依所　歟

一無なりぬ　末のめ　夜なれバいへ事也

一はらく　腹がいたきくといふなり

一はじとれん　半蔀　常のしとミハ皆おろしを是ハなりしだり

まなろ次やうにしたる也　花鳥ニ下ハかうしたる板などをうち

て上にしたとミをつりて外へあぐるやうにしたるをいふ車にもし

ドとミとてまくうへのしとミぢらりあぐるを半蔀と名付たる也

一はしわら兄弟也。同腹　一母こそゆへあるべきれ松風の巻ニ
大井の為。兼明親王とこそ。然ハ彼れ女ハ准じて心うべし
一はつ草の事ハ紫　初ハ紫をもつ草とよめハ文くよめ心ハ明也
一はるちがき　教書文字ひとつくるるち也。いまるこそ
うさはぐ　なぬを云也　一はげしてん　花とづしてハ
なり。元そこなはぐとの心也　一はぐろめも　花鳥　山海経云
東海有黒歯國。其俗婦人歯悉黒染。今案日本ハ東海乃
中の國也。彼俗にならふにや。昔ハいとさなき女ハ左右なく
かねをはざれバ古代のおぼぎのなりしまて紫の姫君も十歳
にあまりまで。歯黒めもなりしとなし
一はしがく　仁和芹河の行幸次幸八条院為作寄れ

輿ニ使物造階隠云ゝ見ニ吏ア王記天慶六年也今案南
階の弓ゝ柱を二ゝ上をかきいぶすをもしぐ
志ゝ云鳳輦をひんがしむきにきもへ事左のワさよりも
紫れ下れあらんかも也
一茲のゝりれ山木花鳥うつ
ほの弟九云茲のゝりれときもぶのやうまえ給ふ事いさゝう
のかぢめなるべし
一茲といふもし花宴の詩に
春といふ詩の字ハおひまあひたり度也源氏の菓花の茲をも
よきていへなるなり
一はなぢろめり おしくもろ時よ
そへ同かくぢられて必もるれ上ハもろぐとこゆりなり
一茲の鶯さえたる 春鶯囀 弄花 一名天長 宝壽来と云
一はかりなれ 髪そぎの調度の中に海松を一ゝさくりゝ

事あり。碁盤・山菅・山橘・海松・青目の石二ツ並也。是等をそれ
髪になぞらへしそのつやもる　一　はゝきゞや　葵ハ葵といふ
よせたるへきハおふくさまあり。神のまつりとへばそのまつりのくさ
ありけれども付ては付ていへり。されどもひろしとなる
一　来やこぬるとも先ゆかんたれども　ちん　此詞は引哥あれども
所説の心その給也。只来れるのしめのよこしまいりきんの心たる也
一　八省ありてたてけるか　孝徳天皇大化四年二月始置
大極殿をば八省といふ。すべて八省ともいへり。八省の本院なるが故
也。朱雀門の内一町にあり。南限冷泉院北限中御門。東ハ東乃
坊城西の坊城を限也。出車ハ八省の東の廊に立つゞけらるべし。
いふ　車ハ人給の車也
一　白紅日とつゞりて太子をいふ

いぐし車ハ人給の皇也

一白虹日をつらぬかつ太子をちらう

前漢書曰音荊軻慕燕丹之儀白虹貫日太子畏之　燕乃
太子丹が始皇をかくふけんとをしに今源氏をことへたる也
一沈本に日はらぬかなと一角云く日にはけるあ義也白皙
とつらぬけども此ぬまとしげ心ざしとげがたき事
と荊軻をそれたる也今源氏を荊軻にことへたり冷泉院を
太子丹によそへいへる詞也　一無秋のれさきやう　春秋御
讀經同云源氏のとこなひ給由也定たる法事にや是も
一源氏のとこなひ給れ一勅禁中ならしは定也
一はしのもとのさうび　甕頭竹葉經春熟階底薔薇入夏開
一はつ房も房のこゑのなしきは是もまた忘しくさんのこぐ
ひなりと云々
一はなぐのかく紙　鈿をはらむ

也縹唐紙　一はうし給ふ　柏子をとる也
ひやうしどもとる事もま　一はちかさ　發眼をとる也
紫明ハ蟀吟拂心也是ハ須ても讀
一毋くらしとて　朱雀院ハ延喜帝十一村上天皇ハ帝十四皇子
まて此両皇ハ毋中宮温子昭宣公の女也兼明ハ第一親王られた
更衣腹故人臣也此例ハ　一はちすきおやよ　手愚親ヲ賢
子のまさるハ也況愚子乎　一はるもうしろき　臭の動かや
めくや目の動とめすじろきどつかづとし
一はうちめ　歯固え三の日の事也歯ハよはひ也則よはひを延よ
めうた歯固ハよはひをとるむね也蕎つき六本ヲ杉並をらむ一の臺ヲ餅
太根摘をも之也此餅ハ近江の火きりのつくりた餅を用白則其國乃

鏡山の哥を誦ぜ

一はつれおしこゝめべきおさるき人

此初て文書哥とよ無を云事

一茲におれつ俗よが代おりと

云心也

一方等經の中に方等經の中よ

四教をあらべて、あらゝ祝あへり、是ハ淨名經ホ也、此時昔のさと

まゝもつゞず、今此さとりともえ須、不化の衆生、ただ元統とあらり、一會

の衆生を雲猜乱して加葉泣事三子よふるひ三子界へ泣声威光

とふるふと云心歟

一は孫とあらべ四皓朝に出仕の言

羽翼已成といへり

一はあらいで放おと云事 花鳥

一統不詮寢殿と云て母屋の内ハ申分志まけて中を隔ぬ

情あるへとよひいるゝ不代云也、此帳障子立そへらるを中のと云也

一八条或アルの此方 仁明天皇此子本康親王を紫上の父家に比し

寄云也　花鳥表

一菜のかは　ちりけし枝とハ早下の心也。うつくん袖ハ姫志のたまれ焼物なれバ此袖ハわきくハ何らしと也

一去のたむけのぬさ袋　すきたる袋也。三月の末なれバ去志菅引手向と也。ぬさは旅引の人ハ袋ニ入て送物也

一けつり子が　祝子がゆつまのびたる霜ハ神の納受のいちしるしいふ心なるを

一去のことの日ハ　去の調子ハ大変なれバ　かたぐれ引つるにこぶれん

一菜のかとのへて　蓮花也

一はしきたれ　服黒さ也

一もちす葉洗　来世ハおなじ

蓮基と契れどもたゞ今日の別がかなしきも也。女三の法事ニ身をなしもて結事といへり。女一會　僧心也　弄花表

一羽衣の羽衣ハ是れ縁にいへり畢竟皆空と読ぬ也

一菩の香は菩の香にさそはるゝ身にてハなきと早下の心也風の
あらんをまぐさずまいるべきゝ なれども此心也

一はいしなり 桃家礼して女がたへも座上の身心ざし浮世
此定られ無法 一橋姫 橋下の姫大明神也

一菩かさるを 珂路など也 一はりせ 太刀也 守の為也 一説
みそぎ此迎の車なれば陰陽轉士なるべし

一はなしや 中ノ君の除服をよこしぬ心也

一菩ゆしせうたくこ ひぐのこゝが菩をゆしせうる事を

一菩のなりに 不是花中偏愛菊此菩関後更無菩 元牧

一は山の志がるを 大君のゆりを君んとせひぬべきとも也

一毋ぞ君ぞ也　浮舟の母ハ早下ちたる人也。殿前の時ハ早下なく。母ぞ君
ハ如ニ文とこしきたる也　一はんさい　犀角のまぐらおなり
所ハ志たる物。班犀帯。宮位ハ位の人帯ハ用之。云々眼者為犀
帯。諒闇ハ班犀とさすまやなとしの帯也
一蓋といへも　女郎花の名ハあらはらもなへての家にハなひか
ぬそと也　実にはらたる　一はしのこ　蓮子数盃と詩に
も作り盃の名也　蓮子の女なり青磁盃也
一葉のうすきをとし　陵園妾云。龍笑如花命如葉薄　白氏文集
此詩ハ君恩のうすきことを云。今物語のハ命の良にのみへり
に
一にけなきしず　無邪気也　まけなきまてはなきこと也。まけなき

一しほぬ也。まけたるつじにハ落色ハいろ也

一二のまち。次の町と云心也

云也。饒瞽

一にきはしき 冨貴なる事と

一にうきよのまち 俗人のまち也

一にほさうるひとりもれまじのくもちなき

一にくてわずけなき 疎まてハなましとの心也。たとへハわか身也

一にあすく 無二勇士と云心也

一にしのくい 西對也

一にびんそ 祖母の服衣也 三十月の服也。鈍色也 これやうなるとハ

いろのられぞと云也

一にだめられぞ このびん色の黒きの

すくなき也

一仁王會 七難即滅の文あるを

まうまらさ まくらかや

一にこきばうし。錦郷の心ま

いへり

一にびんあへのかず 眼者の下濡

のへり。もうこ。よび文の印を用。黒儿帷らは。末丁の事紙忌ぬら
まして。まのきてゐらてん也。惟ハ是もよびいろなるを
一にうがく入学也
一にほ島は鳴島ハ枕詞也。かげを
ならぶる島也。若ごもと。おやめとうけをならぶる也。笠散と。流氏
と引別るまじとこそふれ也。つゝまハ若ごも也。まとこと又書通ぞる也
一日本記 此巻始神代至持統天皇御宇
一西山ならはる
仁和寺と云也。光孝天皇の御願なとしる事
仁和年中にはくられたるよらは。仁和寺と号をら。又義平の門
ハ。天暦六年三月に出家なりて。四月に仁和寺に遷れあると。此物
終の朱雀院ハ。義平の門に准じて。かれこれを云合書ル也
一にしのうゝ十方 従是西方過十万億佛土有世界名為極ー

巳上廿八

一われ下紐もとくろうさこノへのこゝぬ

来ト阿弥陀經

あさねは白ひるしと云也。さてわうかされとハ云つの下襲のいろ也

えび染の袖ハ。殿上人の下襲の袖なり

一にゆりしぬ給身まゝそて　人さらの声と人息所の給まは

こゝそてまあれぬ給身と。螢ときしてのおふころあると

一にあさゝ。鈍とそろくあすろ心　一にけふほへさこれはこゝやハ仰るべき

遊仙窟　容貌似舅潘安仁之外甥氣調如兄崔季珪之小

妹　氣調のいさぎしハ兄のごとしと云給なそしいへふら。白家

の事をいへるか。女一ノ家まつたのあくる白家の兄まそていゝせ給ぞこなへ

と云心也　等　一本ノ家ハ女二ノ家の人とおくしやうともゝひとへさせ

給ふてこ給しるとハかく鈍あくる心なるべし

ほ

一ほい（きりつか） 本意也

一ほかげ（くしあく） 火（かげ）親也

ちかき女を女とへて云也

一ほくゆがめて とくとくとくとくめ也。方曲（おくゆがむ）也

一ほこつかか心なし

一ほのかにも（丹タクカ） ほれかを笑かし

夏（こと）と。彩（のさだ）端をよきかか。今少将が妻（つま）なれば。それをかこの心なり

一ほのめり寸（丹） 寸（なだ）ハ霜をとは。我心が寸ハ源へもひこぶる心也

一佛（ワかむらされ）のれもうべハくるさを入ぬも 從冥（ヨリクラキ）入於冥（キニ）永（ク）不聞佛名（十方法佛僧）

一佛ハとのけりうて 上の詞を得らけのれもうべとあ。寝も、秋

うろ所しハほらすのもうの詞をんとれうろなる

一法花三昧とこゝろふぐりれきんぼうれ声山おろしうけきて。

一上親(レクハン)は四種(シシユノ)三昧(マイ)あり。いとゆり常行(ジヤウギヤウ)常座(ザ)。半行(ハンギヤウ)半座(ザ)。非行(ヒ)非座ノ四種也。法花懺法(センホウ)ハ半行半座の三昧(マイ)也。懺法(セン)ハ。天台大師(タイシ)或説(ワクセツ)等式(タウシキ)にてゝ給ふ事六時(ジ)は六根(コン)の罪(ツミ)を懺悔(サンゲ)する法文(ホウモン)也

六条ノ有房(アリフサキヤウ)云懺法(センホウ)の曲(キヨク)は山風のおろしがし瀧(タキ)の川ゝひ

一がしといふ口偈(クテン)のことをさいひらそへて書たり。昔かく女房ぐるまたちの偈わけるは。今ハ此名目(ミヤウモク)をぐるまたり偈(ソウ)もなきよりやと云ゝ

一ほんなも手本(テノホン)はも也

一ほそろくをり　保曽呂倶也(ホソロクロ)

利(リ)　禾(ガリ)の名(ナ)也

一ほいく　殆(ホトンド)と云心也

一ほそ(菱のくん)　廊(ムラ)也

一法界(ハウカイ)三昧(マイフ)普賢(ゲンダイシ)大士　南無法

界ゞ三昧普賢今(ゴンサウ)相と云ゝ大士と同(シコト)変也。法界衆生(シユシヤウフ)普賢(ケン)と同體(トウタイ)

と云義也

一ほけられて　なれたる心也

一ほうしげる　ほうちゃなる心

一ほうつし　仁徳天皇の御時始て

一ほうれけり河也

一ほんさいのうたぐ　弄　世を政

一法しいひたりと　寛筭供

一ほかれ里にいまたかりぬるや　花　此所の女ぐひなく面白く新

ちりよりも心也

一ほうりとうすきかたに花うつ

ほのもれぐちにも蛍をつむ夏　河内方にいうすき肩ちなど

よむ只ひぐるぐのうのうすき所よりもなるなる也

一郭云なぐ　四夏月交雲外語二十二更後雨中声

一佛のいとうなりしき心にて　凡如来出世の本意ハ凡聖一如善悪

不二の理を説て衆生のまよひを速に翻さんとそうしめて大悲
心うなそしさ心也なほ玉も実報花王こそ花厳経説給時ハ心
うまも法構まうなりしさやうらくなぐをぐわて衆生まことを
なへり仏も報身の姿こそ修行の報にて是又うなりしさ形に
て説なふ三衆唯一心の法なれバ仏の心もうなりしさなり
一ぼさいとぼんなり　佛の内訓あらされてこれバ則菩提則
煩悩也純一実相にして更に別の法なし
一ほそびけめくもの絹櫃也　一ほどく皮　鷲々皮也
一ほんにすべき　玉と女の本ご定給こそ
一ほけさり　なれたり心也　一ほりかな　朗あきらかの心
一ほそなるが　末通女のきりかぎぬ也こちこそのね也若后逆

女れ・おとなしきも悪風也組まて細を付なり

一佛のうでしの仏縦に滅度志なへども・常住此不滅也と説給也・不滅をしらるゞ・男子達歎しごとく・尼公の心を云也

一ぼんしゝいふ梵字也

一仏のおなじちやうぶい花れ帳臺のうへに・仏とおなじく經の机をかれたるべし

一仏のおりすなり所觀經云・阿弥陀仏・去此不遠・極楽莊厳おもひやらるゝところ也

一仏にもなりぬへ紫の我事を

一ほよいでぬ中志のほに出ぞ

のなふ也

して・下に拘せひのまとしんじての哥也・志のずきは・ほに出ぬ拘なれば・無ふ薄と云一義也

一ほとけは經云實此者不誑此者云々

一ほとけは經云實此者不誑此者云々

一ほうけ（法性寺）ちうし　負信（テイシン）云（コウノ）建立（コン）（リウノ）しぬふ也

一仏のきえそふ　仏のいまし給ことなり

一ほうゝ者　ほうめきゝ海心　名番（シヤウバン）の蜜（ミツ）をすくなく入て、かきたる也

一ほづえ　末（こず）也

一ほく　反（ほんご）台也　ほんぐこよほんし

へ

一べら（タイハ）なり　別納（ヘチナウ）也　前（ニヘ）に立たる屋也　曹司（ザウシ）人の住（スム）也

一へんぐえ　變化（ヘンゲ）也

一へいちう（まつむ）　花　平定文（タイラノサダフン）があざ名也

云云　平仲（ヘイチウ）　宇治大納云物語云　平仲が女のもとへゆきて、かくまねをして、硯（スリ）の水入をふとこしろにもちて、目をぬらし、けりを女心えて、墨（スミ）をもちて入たりけりとしらて、まゝぬらし、それが女鏡（カミ）をこまきてよみたる

紙にそれらさは君がこすれば人にすこつくかれそしたる
人にすこつくはよそにはやすこれかんこれことや
一ゑんにき　文字れへんとつさそいろつ覚しろうと云事なるを
一へいしなどこゝろ　瓶子（ヘイジ）もやく事也
一へんげの物とおぼしなしそ　河海　四生（シヤウ）の中れ化生（ケ）と云べき
かと注（シル）されたれど人界（ガイ）は劫初（コウシヨ）の時こそ化生（チシヤウ）などはあるとこ
そしられ今の変化（ヘンゲ）と云ハ佛菩薩（ブツボサツ）の願力（クハンリキ）或ハ定力（チヤウリキ）によりて
事（ゼンアク）善悪（ゴウカン）の業と感じて（ソノカタチ）ゲンをあらず事あり変（ヘン）
易生死（エキシヤウシ）らはこれを云也布袋（ホテイ）和尚（ヲシヤウ）ハ弥勒（ミロク）の変化（ヘンゲ）寒山（カンサン）拾
得（トク）ハ文珠（モンシユ）普賢（フゲン）と云がゝしらし　花鳥上下略
一へいしつう　笑（カモ）義（ハタ）へ幡（シヤサン）社系の時四位四人如位四人以上十二人を

めして具(グ)して於(テ)神(ニ)前(ニ)東(アツマアビ)梅をうゑさせらるゝ也それを陪(ベイ)
浪(ジウ)とは云也 寿此所ゞの陪浪ハ近(コノエ)清(ゲ)ぞ此人ゞ也
一へぐそ(冊すゝ虫)なく 女三の我ハへぐそなく契りても深氏の心がさらうし
うまじきとれ心也
一へぐそ(冊あけまれ)なさ 心ぞうちハ無(ナク)ニ木(トウカン)閑
なれじとはいかゞとなるも

と

一とさめ(きりつか)給 時(トキ)めくハよりて付うてまた成べし生(ナマメク)人先こく
出めくさ心同し
一とのゐ 宿(とのゐ)直
一とうまえもれもの給ち須 殿(とん)の字也
一とくさ もやくとれ心也
一とげさせ 何まても志こぐる心
一とうもしびをうけ 長恨冊(ニ)孤燈(コトウ)挑盡(カケツ多)未(タハ)能(チムルリ)眠

一とんしき 屯食(トンジキ) はくこいねや今の島の子と同し

一ところを紀 所をげきや

一とまりまとも 本妻(ホンサイ)まことや

一とりやさん 乾出(トリイダ)しやさんの心

一どち 共(トモ)や友(トモ)どち女どち皆(ミナ)友(トモ)の事(コト)や万風(ドチ)共とあり

一どちり帳も 得馬(サイハ)采哥詞(ラノウタノコトハ)や どちりハ幌(クワウ)やちやうハ帳(チヤウ)や

一とうもなくて 無動(トウモナク)や

一とうでのふ 乾出(トリイデ)治や

一戸(うつをと)まちはなはなけハ妻(ツマド)戸のかけかねや

一とさ海へく 外(ホカ)ざまへ来(ク)る心やごぐちがくろなるべし

一とけがさかし 此息(ミヤストコロ)所(ハシメ)の始ハつれなりしをさ海ぐいひな

びかし治て又ひさかへしをとづれざらんハいとおしきとなる

一とうまざらハさをめて をこりなどもとこらゐやうり

ちひいれど。まぎらはする拘也　一どきやうのこゑ　續經聲（トキヤウノコヱ）。僧勢（ソウツ）
ちるべし　引声（インシヤウ）れあらぐ　經頌（キヤウカ）

一とに外（ホカ）也　一とにあるて一たび記らくハ
優曇華（ウドンゲ）の度（コト）。人壽（シユ）八万歳（ザイ）の時節（ジセツ）。金輪（ゴンリン）王（ワウ）遶（メクリ）四万（ヲ）。其時海
水半減（ナカハゲン）ずるよりて。此當出現（ゲン）するなり

一とこゝてまつる　獨鈷（トクコ）　一とハぬといふさはく　史婦（フウフ）の
中にはいふべきにもあらずとも。めけるどのいふことだとれ心乱

一とまろ身（あふひ）も　とまろ身ハ源（ゲン）。消（キエシ）ハ蒼（アラヒ）也。心をくらんとは。れ息所の
もれくけまちりぬひしれなほのゑうし給也

一とうぬん（さうま）のお話　西洞院（ニシノトウヰン）とも。東洞院（ノ）ともいふべし

一とうくハ殿（でん）　花　登花（トウクハ）殿（デン）ハ。弘徹（コキテン）殿のかまあり。梅壺（ムメツホ）ハ。又登

花夜のましまあらいづれもこれちうき夜舎(デンシヤ)也。むもれたりとハ
ひとし月人もすまず。塵(チリ)にむもれたるなり

一 とのゐ申さふらふとこはげくるなり 花鳥 夜行(ヤキヤウ)するを濤(コノエ)に人
乃をしへ事。おれ扇(ツホ子)の前(マヘ)にてこハぞくれといへ事如べしと云々

一 とくひと行と申 花鳥 小山羽林抄(ウリンセウ)云。宿申(トノヰモフス)。実子時(イ子ノキハ)。左陣(ヂン)毎(ニイ)
刻(コク)夜行(ヤキヤウ)。丑寅(スウシトラノ)刻ハ右陣勤(ツトム)。丑刻(ウシノコク)物節(モノフシ)一人申(モフス)宿申(ヰモフシ)雖
由(ヨシ)云々略之

一 とくしおほかうたに 虎狼(トフオホカミ)

一 友(所)ちとる 我ひとりとせへハ子鳥ハ友をつれてけとれ心也。この
しとは源も又都の人にともなふ事もやあらんと也

一 とくひ 知人(シルヒト)也

一 とくしやうに 死様(トブヤウ)にも。ちやきも

一 とくしげハちけしき波風に 弄十二三歳(サイ)の時(トキ)。遣唐使(ケンタウシ)りて。

波斯國に到り、聞二琴壱一孝行の者也。阿陰羅琴を造りてあ
るへし。夏あり。花うつかの抱語。どしかげ。しこさまれまて。まろ
うへいるさるゝに。悪風にあひて。波斯国行。又栴檀まれ下に。琴
を引ておそぶ処に至て。琴をなるゝひ極てから。霜雪をふるを
天地をうごかす。日本にかへりて名をあげたる也

一 どしれう地の節会　年中の節會也

一 どしふれど　この契は子にそへ家親ど読る也

一 年をとめかさりて家のれまして　蒼雲諒闇の夏三月まで也

一 あるの大きやう　大政大臣内大臣新任饗の事歟

一 どりゆの手にき　箏取由也。ゆの者也。左の手にて謡ぞ
ことを事なるべし

一 どしこ　年忌。一説。どしこは。

十まミつるを云也。此年満也

一年月へぐらるゝぬれど。おりざるを

しタがれ此詞末摘巻に月。玉かづら夏をかゝん為に。先夕

がほの事をかゝり

一こしをんて　哥の心。面いゝ海り

つゝの夏を。兼ていえじきれさいもいまとわんじ法かに。坂監に

とられなば。神をつゝしとゝ忌もんとや。監りゝ忌もん所をも忌て

よあれば。折忌けるまゝまと。詞にも書る。寺とし。を通ての哥を。

我返哥にていなしと。監りいかるや。むもめども。為理をあらぬやう

に云こさりする也

一こし月を　拾遺集に此の類

あり。引哥松上に

一島のがく茲やかに　島も一越

調系也。島の系に感じて。茲に鳴鶯。其池の氷島も鳴かゝと也

一とねりどもさへ　花とねりは近清を云なるを

一とよりてこそ　あふよりてハ奥也。昔によりたる心也。とよりハ外
也。ずゑになりて也
なるを
一としまゐり入て　としたけたる
一無家の宣旨なる内侍のもけ。
女の宮也宣旨と。内侍と。兼官したる人也。此湯にまいる人なる
べし
一年ごとに無秋の神楽に
明石入道の軌に。毎年をし神楽度。又ハ外に軌とくり人
なりとみしたるを
一とりすることを　稽古すること
こゞもの夏也
一時なしぬ雪霜をふる習　河海うつ
国の一としかげ琴を作りまつるに。おとゞのうへのかりしらぐつて、
芸のごとくにちり。今一作りまつるに。六月中十日に祖に。雪ふる、
まれごとくこゝりてふる。此門おほきにおどろきその給。げにこ乃

しらべハ先づしきもやかり是ハ急いとくと云ふ也まちこしの
門の引給ハ瓦(かわら)くだけて雪ゆりとなん罪つくふ。これ五ハ
いまゝこゝぬこと成おやしくめつしき人の所えに云ふ

一 こしもせめられバ年れくれのせまりたる心也

一 こし比(タチヨリ)と 柏木後(うしハきののち)三年になりぬ

一 こちのせう 源氏論代(ロンキタイ)也 注(イ一尼)鷲(トタカ)ハ小(せう)ハ雄(をとり)大ハ雌(めどり)雌ハ
ぢくちくと鷲(たう)を鳥(とり)といへり

一 このねすぐさなとしハ髪(かミ)をさけたりうなりしきこづくも束(そく)
帯(たい)ハ総角(あげまきにつかハ)童屋ニ人のすぐさなり

一 鳥(哥あけまきさ)の巻も 王前云 一鳥不鳴(ナカ)山更幽(ニカスカナリ)山ゆきこころ也

一 ごうぎくれで不動(ストウセ)也 一 とよれあら 辰日(たつのひ)也

一 こしふとも（哥うさ舟） 常盤（ときも）ぬまゝをぬへり

一 どう（けろふ）ぬい 灯臺（とうだい） 一 ど紙（けろふ）ぬ 十ぬ 又（とを）ぬ 何（いぬ）に

ても用ゆ。ほかの女一のこゝやに心をかけしに似（に）たり

一 このもりのこゝ（てゐらひ） 自殺の童名。伴說ことも書。女をば父ちゞ

の宮（くゝん）を吁（ふぶ）夏（ことつね）常の夏（そと）也

源氏目案巻第二

ち

一 長恨（きわつか）哥のれ忌 白氏文集（ハクシブンシウ）の内にて。玄宗（ゲンソウ）の楊貴妃（ヤウキヒ）にをくれ

ぬひしも今（イマ）桐壺（キリツボ）のれ門（ミカド）の更衣（カフイ）にをくれぬひし同心也

一 長生殿（タクガ） 玄宗のれ殿（ゴテン）の名（ナ）也 桐壺の巻にをくれをうしし

とあ一ぬにあらはし

一 ちりぢり 家（ツゆ）ぢりちゞい

ふ心や　床夜なぞしこちらの縁あり

一ちいろとも　みちひ分道のとは源の心をぶめなきをよみり

紫上やうくおとなびぬふ心なり

一ちやうふぞうしなど　延喜式云凡齊内親王除行豫定

監送使參議一人或以中納云元宛ふ弁一人史一人六位以下官人一人

西夏云大臣着陣定以前大中納云各一人參議二人四位四

人已上勅使中納云參議各一人四位六人長奉送使中納云

若參議弁史中務丞各一人已上參向下外記云々作式

尸云々　花今案群行の日以前に勅使とは河原まで供奉

して歸參して長奉送使は伊勢までしるがひなりと上

洛の時弓場殿にすゝうそことゆへなくれ下着の由を參門

もれば字名されたる由。職事して仰らるゝ事也 河指遣集乃
哥の詞を引ま
一ちじのへうなるゝ
七十老致仕懸其所仕ゝ車 孝經注 執政臣致仕例略ゝ致
仕といふは七十になりて出仕すましきによりて此ゝもちゐ
ゝる車をも先祖の廟にこれをかゝる事あるを故に懸車の
齢ともいふ也官を辞といへども執政臣にあつるへきよし
河海にしるされたるゝとおほけなし
一子枝つねのり 千枝常則 生高名祿共以益工也
一長恨哥 王昭君 楊貴妃は馬嵬にうしなはれ王昭君は夷
狄にとつぐり。仍ことゝいふし給也
一ちうさすこと 寺左のまゝてをもて事也。柱琴にて無

ちう・琵琶(ビハ)までぢうと云

一中将のさふのはかされをつぐひ・

五月四日を荒手番(アラテツガヒ)・五日を真手番(ニテツガヒ)云々花・手結(テツガヒ)も左近(サコン)乃

真手結(テツガヒ)也・五月五日にあたれり・夕霧(キリ)・中将左近なりなに・

とのこぞも引つれて来らんずる由ゟ給也 手をつぐひハ馬

ゆゑの時・二人ばかりけて射(イ)る事歟

一ちうぐんにまちぬべき(まさけしら)いづ方にもつぬ心也二仏(ニブツ)の中男(チウヂン)也

一ちりすきたる(梅かえ)透(スキ)たる也

一ちしき(ワイ上)地鋪(チシキ)ハ・唐莚(カラムシロ)に大紋(ヲホモン)

高麗(カウライ)へりつけたる物也

一ちす(ヂツス)帙簀(ヂツス)　書物(シヨモツ)の帙(チツ)也

一ちやうれめしつぎ所院の廊(チウ)のしたぐのことにいひけたる

人なるべし

一ちはいとかけたるなりを乳(ち)志

たゝぬを云也かけたぎたる心

一持佛(すゝ虫)　持佛堂(ヂブツドウ)はつまぶそ

られざれども先佛供養の用意也

一ぢんのよかい棚也ちんハ沉也　一ちやうしぞめ丁子染番の器

夕　　一ちかさまも卍　近傍ぢ将

一ちかがましきれ丁　ちかれ此はちかるこ云心也

一ちか囲い玉かぼくに京よりもちかほいきくるちかにまじりる心

り

一りむじ此もてあそひ何にても此ぶまちくるかの事をする

を。除時ぞ云也　一りむじ此祭の調示　賀茂乃

除時の祭十一月にあ分事也　尚日ハ中の酉也是を小祭

と云也調示ハ午日也内裏にてあ也

一りちれ志くへハ律ハ秋をつきぞる也

此ごろハ十月なれど。冬ハ秋に属して

一柳花苑　上古ハあり舞也今ハ雅なり

一りんじさやく　客とさやくこよむべし。京条院大臣なるべし。

接政の職を兼たる任なれば。なずらへていへるまや。正月二三日の

男客人の氣まわりといへり。折数たりきなど用也

一龍頭鷁首　竜ハ水をこころまもせ。鷁ハ風を心に任すりや故

此形を作りや

一りちをばつざれ抽ましこれ。

りちを次呂ハ其律ハ秋也。日本ハ呂律。唐ハ律呂。本ハ律呂也

云律ハ陽遥呂ハ陰助也。然だ僧ハ呂律ニいひて律を次に

すりや其をまきれ事ニ。源氏ニ御心乱。調曲をも僧ハ呂律もち

ねのしらく呂律ニ律を次にすりなり。僧馬ハ呂律ニ申

付たる也。本朝伶倫（レイリン）の相傳（サウデン）にも、呂律を陽陰（ヤウヰン）に用来（モチヰキタル）云ふ

一りんの手　糸に珍数（メツラシキ）手紙引を、りんの手と云也

ぬ

一ぬざ（うつきこ）すべし　ぬさすべらうしたるなり

一ぬかぼく　稽首（ケイシユト）額突（カクトツ）礼拝（ライハイ）也

一ぬさ　稜麻（ぬさ）挽（タヒ）まて　道祖神（ダウリヅン）に手向（タムケル）なり也

一ぬ（まつむ）もてまはれぬへ　源のつゞ身をまれとぬすこもてさりがる

き取へハ行（ユキ）給也

たるを云也

もこ云心に叶（カナ）へり

たる祢（テイ）也

一ぬ（もかちのか）わかくしたる　泥（デイ）にて忍ぶり

一ぬ（らもさふ）て人　賊（ゾクヒン）貧家（カ）をうわぐる

一ぬ（三のり）さかけたる　推（サゲ）物の衣（キヌ）ぶさ

一ぬ（卅）さもあへぎ　玉ハ糸（イト）にて川

ゐざこむ分抱なれども、ぬさとめぬ玉の代なれども也

る

一 るりぐ(ぶかうら)　玉かげらの童名(ワラハな)　一るい　親(シンルイ)類也

一 るてん(まちらひ)三がいちう　流轉(ルテン)三界中、恩愛(ヲンアイ)不能斷(ダンキ)、弃恩入無為(ニウムヰ)

を

一 をとしめ(きりつか)　いひをとさんとする心也　陷(キトメ)

一 おほとれごもりすぐして　夜者(ヨハ)專夜(ラシヨウ)晝(ヒルハ)同輦(スステクルヲ)　長恨　やがて

さつしさせた、文衣のそのまゝぬのふ也

一 をさそこれハ　ちりしひろう心也　河　掟(キキテ)

一 おさめ殿　納殿(キサメトノ)　在二後涼殿一　法(ショコウ)玉ありまいり物をおさむる所也

一 をよすけもそおりすり　助及(ショスケ)成人(セイジン)の心也

一たさめてまつり 葬(サウ)也(ハウムル)

云也 愛石(ヲタギ)

一をしたちかどくし紀 押立(ヲシタチカトくシ)也 日本記 俗に氣(キ)だようさる

どいへる心也

一たまれ 祖母(ソボ)也 惣る此物語にうぐら紙おぐとおほくいへり

一たほやけ 公(キホヤケ)

一たばして まつりといふす

とおばしたるなど云たるおほしたぶ 捨てもといふ所もあ

所まよりて心うべし

一たりします 殿(てん)の東のひさし

清涼殿(セイリヤウテン)也 御殿(ゴテン)とも云也 東庇(ソヒサシ)孫(マコ)びさしあるべし

一大殿にくらん 殿人の衣(カミ)の大殿(キヤクラノキヤウ)と云心也 二人をてはなし

一はぞこそまつりくて 元服(ゲンブク)以前(イゼン)は赤袋(アカイロ)の袍(ホウ)の腰(コシ)ぬまゝ

也。元服以後ハ膝をぬひて。黄(キ)なる袍をまとふなるや。又淺
黄(キ)ともいへり　一たほうの紀　此酒
一たとゞかしさばゝ　左大臣の源氏に。葵(アホヒ)の上の事をされ
ことにほのめしあふるをいへり
一たとゞまいりあふべき　此糟(ユウ)の盃酒(ハイシユ)ハ。殿(テン)上まで。引(ヒキイレ)入の大臣ハ。
交(サラ)に此前(コセン)にめして。此盃(サカツキ)を給ひるや
一大うちさ　褂とはさぬのるや。是に大小あり。男し束帯(ソクタイ)
虫衣(ナヨシ)などにも大褂ハなさぬるや。大褂ハ男(オトココ)。小褂(ウチキ)ハ女のさるや
一たりひ川もれこもれ　折櫃(ヲリヒツハ)。まゝまげさる常(ツネ)の折(キリ)の事や。
こもれハ。竹にてくゝる籠(カゴ)なるべし　西宮記云(ニ)木物(コモノ)枝物(エタモノ)共(トモニ)
菓(クハシ)子や。籠(カゴ)をくゝて。薄桂(ウスヤウ)をしきて。又菓を入て。木枝(キノエダ)。或ハ松(ニツ)

まけや大臣甲斐て後ハ膳部を備へ調ぐる元服の時

の人の祝ける詞也と云々

一 おほいどの 大臣殿也

一 おほかくわんじやうの心也

一 たうしき ふかくたるべき詞や

一 たさく 潮じと云心。或ハ顏又ハ更なと云心也。花 優長なる事

や面目らしきことと供も云や不可なるべし

一 たはされかつ 油炭也　一 あとのかはつ 河各競 八雲抄二云。

ほれくおる心也と云　一 たはぞう 大惣 おほうらの心

一 女のこれハ志をよくおもんつくもりしさハ女のこれハ也志もハ休字也。

雛つくをもしきはおそもわたくしといへり

一 たひさにこもれる宮のうち 親の家にあるを云なり。苗

楊家有女初長成養在深窓人未識 長恨哥

一おほらか　大やうなる心也　河穏(オホトキ)

一女はてらそてまつりとほし　安説云。源氏を女はなすしと云
言葉文殊(タキ)女は嫌て見る事也

一おとな　十の内七八と云心也

一おほとか　物ほとけ同心也

一おほやけだゝしく

負人(ジン)の恨(ウラミ)なるゝ事也

一おこがまし。嗚呼(ヨコカマシ)おかしき事を云

一おどろくさまし　おそろしき心也。驚(キヤウ)の心とても用る

一おびたゝし　おとろしき心也。海ことゝもいふ云ふとあり

一おもてなき　面目(メンボク)とうしなふ紙云也。俗(ゾク)にはおもなしと云心也

一おぼつかなし　欲遠(ヨツヽシ)文選。とをましく月うらくおそろしき心也

一およびひらなを　小指(コユビ)をくろひらる也

一おほいなるこ　かせぜ也

一おはしまうす　おはしますと云同也

一なさしく おぢやかなり心也。ゆりやかなり也

一なさめきて 臭(えれ)のうぢく心也。おりしきりほつきを云

一たまし所 内産(コザドコロ)所也

一たほめいく 俗にこぼけなりといふ

心也。うさんなりこと紙あばめくと云也

一たほれ あばめくと同心也

一なさへさきて。むねをおさへたる也

一なこまこそ うつけたると也

一たほ(タカガ)ちのさ海 路(三チ)也 内路(ヲホチ) 大路(チ)

一なのれひとりゑこれまもひらけたる。夕鬼(ゲヤ)といふんこともの

縁(エン)にて。ゑこれまもひらけたるといへり

一なちこち人 遠近(ヲチコチ)也

一なこたり 病(ヤマヒ)のよくなりと。病

かなこたると云也。何にても学(ツチ)にあることに愉(ケタイ)無をなこたると云

一たされさびたる 義(キキナ)ざれと云説(セツ)もあり。手よりもたる声(コエ)也

一たほをよ 仰(オホセ)や。いひつけよとの心

一たほけなく 矢心(大ホケチキ)。我は他あるめことは我はけるきといへり

一なこなひ人(ワクむしさ紀) 行人(キヤウニン)や(なこなひひと)

一たくまかろ おくかさ心や。

万葉(ミンエウ)におくまへとよめり。又奥(オクマル) 日本記

一たひとくん(奇) ワク菓は紫(ムラサキ)や。鶴を尾(アヘ)の男にとへたり。さしん

そしなきとは紫の上をさふ也。人(キ)渡るすれよそになりたる心にや

一たなじさ波にもれし給 紫の上も源氏もおなじやうに如(ナヽ)にを

くれなかすをのなかや

一をこなひのらう 行労(ヲコナヒノラウ)や

一たとく 此(コテン)殿(大トヽ)や

一たもへどもなほあるぞかし。(ホつむ)

夕がれの巻につゞけてかたりうち人しくさへどもといふ心れ

一たもふかたことに 副(ヘチ)にさふ人のあるかとや

一大ひちつかき尺八の笛河大筆策詠尺八（ヲヨフ）（ヲヨフ）（ニフエラ）推仮宮長一尺八寸舌（シタ）罫八分。律（リツ）書（シヨ）圖（ツニ）云。大筆策小筆策。又云尺八為（ニ）短篇（ト）一玄宗（ゲン）皇帝（ソウ）（クハウテイ）前身（ハ）羅漢（ラカン）也。好（テ）吹尺八被（ニ）擯出（ヲヲ）云々

一此ハひそく此臺（タイ）秘色（ヒソク）。今の茶碗（チヤワン）也。秘色ハ磁（シ）器（キ）也。越ノ別よりなり物也。まりの翠青（スイセイ）にして時（コト）ニ晴（ハル）なり。仍是（ヨツテ）を秘蔵（ヒサウ）して。弱常（ヨノツネ）に不用也。故号（ニ）秘色（ヌ）云々（ト）。うつ目の抽鉢にひそくのつき。今案ひそくハあ紙き茶碗（ノルイ）數也

一おぎなるがに せなりなどのなりきも也

一おこゝがぬうり 正月十四日又日に京中の猪子（ユウシ）月に案（ゼウ）して拍子（ヒヤウシ）をあゝ方をうたひて。大家（ケ）をめぐりといへり。男踏哥（ヲトコドウカ）といへれをまるべりを代ハ語（タエ）てるし。今の世に子（セン）秋万（シウシ）歳（サイ）とてあり。踏哥（タウカ）

を學(マナブ)といへり花鳥初音(ハツネ)の巻(マキ)に委

一 おひたるをかと 上のものおもしろあつらんといへバ實(ゲ)にまことなり
をもと云や

一 おほろなるをもおもしろくおもふ(めみちのか)

ハ哀(アハレ)とこそさと云心なり

一 なかづきかくハ三月尽(ヤヨヒジン)又九
月に卒去(ソツキヨス)母方ハ三十月の服(ブク)なりよつて十二月晦日に除服(ヂヨブク)なせ
こそのかしや

一 たほしよろしぬ事　桐壺帝(キリノミカド)え
源氏の北子らはちがう給ふなぬや

一 おびハ中将のおびがれなるしるしといふなり　花鳥
融(ユルサル)ハ直衣(ナヲシ)ヲ入(ニ)．昔ハ直衣のきれを帶(オビ)に用ゆるなり．今の世も自上(ジユジヤウ)乃
れ帶ハれ打なるもののきれをもちぬるに衣の直衣ハ二藍(フタアヰ)或花(ハナ)
田(ダ)をかりまつりて着(チヤク)せ．源氏ハ宰相中将なりて二ふたの色也頭(ヨウ)

中将ハ手ハまさりたれど官(クハン)ひきくなりて、ゝ紀二藍(アヰ)の赤衣(ナツシ)を
着用(チヤクヨウ)すべし。官の高(タカ)さハ宿徳(シヨクトク)の色(イロ)ともちゐ。官のひきくハ
ひきくを用ゐるなりしや。荷裏葉(ノウラバ)の巻ハ夕霧宰相中将のか
としのゝ源氏の君のおふとて、非参議(ヒサンキ)のなどなるとなきワ
へくそ二藍ハよけれどのゝへか非参議とハ二位三位なども中将
といふ。とてゝ夕霧ハ八座(ヤクラ)ハ昇進(セウシン)しゐるゝなれバ花田(ハナタ)のなをし
ときゐふべきと云心也。榊(サカキ)の巻ハ源氏の常をうして二藍なり
おびの。ゆぞにまつられてとあるハ両頭中将ハ二紀二藍(フタアヰ)なれバワ
れ赤衣ゝかハ色ふしといへるも。を代赤衣の常に下襲(シタカサネ)の色を
もちゐ。禁(キンジキ)の人冬蘇芳(スハウ)面白掌裏濃打綾夏二藍(フタ)穀おほりて今も
赤衣とさるほどの人ハ。ゐ紙しの色を用べきなるを。赤衣

さろ人の下がさねをもちゐるは略儀（リヤクギ）さぞ覚し侍る

一 おほやけごとおほくそうしくぶす日まで以中将（ヒヤウ）貫首（クヌシユ）ころ
まゐり宣下（センゲ）のことごとうけ給と云也

一 をとしくさにさん自然の時おちあるゝねませんこと也

一 おくしがちる 臆病（ヲクヒヨウ）の心也 一 れ（おほん）をぞ 源氏のとばといはん
と黄（シヤウ）蛇（クヘン）まゐりて れの字を入るゝ也

一 大（哥）うに 笠のすがるは源也 心をなくは心をうくる心也

一 おほ衣すがる 常（ツネ）の袍（ハウ）は指貫（サシヌキ）を着（チヤク）して裾（キヨ）を引はよれつ
ねの皮也 虫衣（ナヨシ）は裾（キヨ）をかくるはしらけ事紀出立ともいふべし おざ
れたるはされたるといふも その心たがはさるべし おほさみは王（ワウ）の字
也 大人のするなど云心あり 又虫衣すがるを利（スナハチ）おほきことすが

ゐぬといふ流あり　一おもとおとゝ　源内侍を源氏
のおさうしまする時よぶ。うだいくと被仰や
一おしゝう　男子をさしていふや　一おやそひてくだり給ふれいも
花村上の女。規子内親王。天延三年に斎宮に立て下向し給。
御母徽子女王　重明親王ノ女　そひてくだりたまへり。これ物語あり。六条ノ
御息所と徽子女王にもおはしまして下向あれば。これらを給ふに女子
あひそひて下向の例あるさによりてかくハいふなるべし
哥　一をとめ子ハ　未通女子　百　サ女　日本紀　乙女
まゝ　一おゝしあなまゝめしも　借
一おさえ　ミクハ八雲ハ　おさめハ下女也。ミクハひとまちてまうす。家
中に掛紙物ハ下女也。不浄の事を生好の絹二幅をぬひあはせて

毎の端を結合て、此丸をひぢにかけ持おや、此女ひきましと云、雖也

一たほえ殿　秋王御京の時、大和路をへて、摂津に越て、難波にてもらへまして、七日に大江の儲所に付給、十日に入京し給也、故に大江殿ハ秋宮飯京の旅館也

一此代一度秋宮の旅所なれバ蒸なるといへるなるや

一恩賜の此衣ハ御こゝに去年今宵侍清涼　秋憶詩篇独断腸　恩賜御衣今在此　捧将毎日拝餘香　聖廟此作

一此そハ此身をもれたず　此門の源に此ぞなへる度以前ハ

えしざうなるなれど給ひ給しとこそしたり

一たほい殿　大炊殿　新猿示記　巨炊屋　旧記に多、大炊屋と書也

一此めもづらひなて　朱雀院の此目もづらひ給ひ、三条院也

れめまづくひぬふるまふひよきたるへし

一たほぞしれ星の光を七夕祭に手洗の手紙座上りをきて

星のひかりをうけしてうるをとなる

一をのかゝりつけるか 身ゝや

一たれもれ をろかなりもれなり

一をのゝえさへ 晋王質石室山見数童子囲碁与質一物かに

東核合定不飢局未終斧柯爛答既海無復時人

一たほこあそび 大れ様や 一たひそめし 松風の巻にあさ

き根ざしとあるなめ此よみぬへり

一たつとれくし おつしは生しや髪をもやしや

一れくらねそひて 牛車 元中納言従三位れ位そひて八一ホのす

凡内大臣ならば一位(井)に成ぬるや。従(ジユ)一位や聴(ユルサル)年車(ヲ)也。寛弘(クハンコウ)八年八月。左大臣菅原朝臣(ノツテ)案(ノツテ)年車(ニ)入(ニ)待賢(タイケン)門上東門ホ云ヘ

一 たびしとけなきとれぬすぐるとのゐすぐるハねおきすぐるのころなるも

一 をびれたる おさかびれたる

一 たるじもちきてりとこそ

也一説大やうなる心也

各留(くトム)半座(ヲノリ)案華臺(ウテナニ)待我(カエン)閻浮(フ)同行人(ヲ) 法照禅師 女會撰

一 をひ(とゞめ)ひけなすまじう 弄(セウ)昇進(シン)に人の逐付(ヲヒツキ)がたく紀心也

一 たるもて おどろかす心也。まるいきしる心也

一 たゞしかいもとあるじ 凡(ヨソノ)字て用。早(ヒ)下(ゲ)しなる心也。かいもと

ハ恒下(エンカ)の云遊(キミタチ)と云るすあり。大饗(キヤウ)などにも人数(ニンジユ)の外に更(ニジハリ)を忍

れこさんぶちといへり

一 たとし右政大臣 内大臣 轉(テンスル)右

政大臣ニ例レイ・忠義キ云・此外まち例多レ・詰シヨ抄セウ に要クハシ

一たひすぐひ 次第シダイ〳〵の心也・おひつぐきこゝろ心

一たれこゝろ すくになすき事也

一たくたかき 臆ヲク病ヒヨウ也・不学フガクなれバ我以なり

一れかいしけ海いり給 しやくすゝや・源氏の院へかりしけ持案也

一たとしあふさ 玉かつら 孝経ニク曰・満ミテレ而不溢スアレ・たゝれさせどゝや

一たゝりやけごとにさ海かたり 左右の騎キ射シヤハ云ふ事也・中か得ハ不ザル射イ

也・六条院にてハ・羽林ウリンガ馬にのりて的マトを射イル なり

一たなしかぎしにてなくさめん 源の後の名ハけがうこも・

内大臣を江表あふこのきこを 弱しゝぶれ ぬぐひにしてなぐさめんこ・呼ろうじ給也

一なしことどもなとこそ 大業ダイゼウ 二巻 若シ得テ為ルヲ人 聾リヨウニウ盲ヲン瘖アタハンシレカ 痘ヒ誘ミツブレメツブレヲシ 斯ドモリ

經故（ヲ）蘿罪（ミウ）如是（ノ）法花

一おやなどれけう紙　論語曰

子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養

不敬何以別乎

一をこりあひ給て　風病發（ヒヤウ）（ヲコル）や

一大原野の行幸　延長六年十二月廿日大原野行幸を模し

ゆきかたり　花鳥委略云

一おれくしき　ほれくしきや

おれて手かり同心

一おほやけざ海まてさう事

家つゝまは私（ワタクシ）よりも立出たりしそなたなれ名出内侍のこの

職（シヨク）ばかりにめしいぶさるゝハかゝるぐしきまゝや又されども人がら

まもよりぞとなり

一おちぐり名　落栗（ヲチクリ）名也

こうさ紅の袴（ハカマ）と云る給（シ）紫（ムラサキ）と云説有紅の常のよりも黒（クロ）しるや

一れがくも此月ハ三月なれバ八月廿日比なるべきれ　花ハ誤れ

一 たなしの 蘭ハ菽衣の心まよせたり。夕も玉も大家の孫とや

一 女ハうつまさるゝ 婦人有三従之義無専用之道。故未嫁従父。既嫁従夫。夫死従子。故父者子矢也。夫者妻矢也。孫ハ養子なれども。又寅父あり弓ともゝ沈身とや

一 をうなとつけて 嫗老女のことなるも

一 おりたちて 山哥。密通の事をくさしてよめり。ひたりバ。たゞの川によみなきなり。人の漸とはたゞとハ人の妻にをんとは

おもはざるしとれこゝろなるも

一 おもはじ 中道ハ玉への通路なるも

一 おなじすは 鳥ハ巣に二度かへぬ物とや。玉を鴨子に比して。

卯の一不見にたとへたり

一 おぼしさきに 思萌

一たまなくてくだす筆ハ 下筆(クダスフテ)ハ書事(カクコト)也おまなくハよりぬ
りきざ海なれど、をどりハ口まじきとたとふれぬ心乱
一たほどれぶくらじく 切灯臺(キリトウダイ)とてこじりさる
一女のことにてなんりしこ紀人も 花 寛平(クハンヘイノユイカイ)遺誡に左大将 時平(トキヒラ)
先年於(テ)女事(ニ)有(ニ)不失(シヨシツ)どる 一 若上 たほいまうちぎこ 内府(ダイフ)ハ右
政大臣なれバ、おほきおほいまうちきこといふべきを、おほいまう
ちきみとあるも、ゆゑ、例(タヾシ)これも同事といへり
一 此ぞのつくる十二とそく、夜冬のれよそひ、花(ニレイ)例ハ引ぬへり略
一 なきを拠のつくるぬ河 置物机(ヲキモノツクエ) 唐羅(カラノラ) 末濃霞(スソゴノキホヒ)
一 若下 此位につせぬて十八年 十八年ノ左位(サイヰ)ハ清和(セイワ)天皇の例也
花鳥弄花に委(シ)
一女ハ妻とあられぬとぬるき人の

女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女　毛詩

一おほくのさしをしらぬ國にすぐしうつほのさしうげるや

一をさてひろきうけは抽人の心ぬうけは抽にたとへてのゐへら

一おさてゆくそもしられぬ　花　此哥はそこをもいるゝ哥也いづ

くれ文字心紙やまそうべきや云々私云此哥の結句なる　後宗光院法印ぬけ

一女の力はこれおなじつゝかうさ　我も人もおなじつゝかうさ

まれは女ぞこや　女人為業障　涅盤經略ゝ

一おやのけうらかもやつれぬへら　親の孝にはをろるらしゆへ

くいへか子れとろ孝をしらくしこまへる

一をくゝかゆゑ笛をそへ宮　笛の緑　頌抽あるべし

一おほやけのちうき海もなる　近衛大將也

一六のハ一夜報するあひあひしす八宅ごとにそてハあることゝさは
世上ではいふじとや　一たそれの行ゞし　竹鳥の翁が
天や姥のこ法のあへり　一たしかれ　このこハ菓とうき
あへり入無余涅槃如薪盡火滅　方便品
一大かこハ法こそつむすべきは摘ミ罪を法ねする
一大ぶつかい雁を幻にして術士なりハ法の切米を寿てとや
一小忌まで青摺十一月中の卯日新嘗會辰日豊明節會まハ
山あゐまですれるとこと云擣法ぞするなち
一れ傳名も叢和五年十二月十九日始之云ゝ今ハ吉日擇める
一たはたれ源の由子とゆへバ文柏の良陳のはやあへら説まこと
へきんにあしぎこそやべきへあしとや畢竟無始無終の理気

一（異ニ竹門）たつてこバ菜をちくこバ折まさしんされ心やや

一たらあづれて（うしひめ）　むちもづれさる心

一たのみさし（たのみなし）　王氏（わうじ）の四位や。人目わくべき時なき。然（しか）まちなきや是

一たのもし頼まれ日心すや。弁なきぶとすむまびし稀也

一（異）たつ山の　松葉（まつば）の露ハ消（キエ）てもまたかるや。八ツ家ハ消てものまおのさき

心ぬべし。松葉の詞瑞発（ズヰハツ）也　一たひきらげる　服者（ブク）のなめ。ぶぢ

れも萱草（クワンザウ）名（な）さる黄（キ）名（な）や。唐（カラ）さへまるひろさおぶてことも汁

うしともいふ彼帯（オビ）と云すや　一たそろ（あけまのなれ）しき神ぞ女の嫁（カ）すべ

き時かすずろハ（スタニ）鬼魅（キミ）なども犯（リヨウ）じて事を妬（ネタミ）と也

一（異）たちじえ代　月枝ハ姫君兄弟や。まひでうらの心いたまへ

深さる物を大君ハいづれの心ざしのひくらぞされ心やや

目上 五十

一なこなべし　大野ハ能名所にこゝひろき野の心也

一をいつきうきなて　ちゝしなどもをず　ひとしく書なべし

一なれがこゝ世　都にて生れなひしかども　古家ハやはて　白家へハ猿なべし　爲ハこすてゝゆけと　そのが常世なるが　中君ハさまあらぬとや

一れことかしをさ　琵琶也　琴ハ絃の熟名也

一なしとの給　進食　日本記

神功皇后紀北到火莽国松浦縣而進食於玉嶋里小河之側御止丸世俗ことにいくといひて酒をだしいするなや

一たいや　紛納しる心也

一たぞさ　おそろしきや

一たすまし　なぞまし　と同丸　うとく　おそろしき心丸

一たほどに　抱うなこ志のをはくしきと丸也

一たかしけのゐらうろ　ゐのあしさや

一汎てうけ　葦人の行を志うけて而よけれども宇治よいまる

上臈のけらてあどありさ由しうらあるまずあるや

一たぞうべき　ゐ中まで生長哉も切そろしく日をちげんと思

ようやく

けろぶ　一なりひさけ　逃走

一なりやくえひつゝん　伊勢物語よ鬼一口まくゐのそゐゐ　河漢云小松

帝時仁和三年八月武徳殿の松原ゐ鬼食人是則大怪也

一大うミのゐう　日本記　溟濛

一なりこゐべし　けめやハ我もち何れゐを入けまじ　えとや

一たされじゃ　綺言也　一女のすぢよ　法華経云　又菩薩

摩訶薩不応於女人身取能生欲想相而為説法云々若

多ニ 内安人 ノセツハウセンニ 説法 不露ニ齒笑 アラハニセシ ニホウヲ 不現ニ胷臆 アラハニサウ ヲクヲナイシ 乃至内法 ノ 不親厚 シン カタセ 況 イハンヤ

復 タ 餘事 ヲヤ

一 たほとれたる 髪 カミ のすそのうぶ

れたる 祈也

一 たほうこの 出家 シユツケ ハ世 セ 上のるら

ひちれども 名去 ナラサリ 祇しをいとひてうとれ心れ

一 なしと 美のうさけ 紙 リヤウノフ 紙 おしとゞかるおちゞ

一 をの地 をろかなる 老也

一 をいこれハまして 思いと云心 ヒ 和 ワウスル 通也

一 をのら 已 ヲノラ 休也

一 たさちがゝ 奥中川 オキナカカハ 又奥長川 オキナガ

名 ナ 所也

一 たまく 侍者 タモト 女を云 或 ヲモト 法許

一 たとちひ 生 セイ ナヤウ 長也 オトナヒ

一 たとちひ 善 ヲト ちひ也

一 たほいま 大 ワラシヤウ 見姓也

一 なひれ をれびれ也

一をいさうく　糺謬（キウビウ）也　一これ　好ほんとうむ。これとうし所

まあら文これとこしむ所ともる。所のさてまよつてすもしくざされ

一をほんべ　贄（ニエ）や。古今（ココンニ）にかへどらぬ。大嘗（ダイジヤウ）會（エ）なるや。何ともまつる心

一をひられ　老枯（ヨヒカレ）。総角（アゲマキ）に一の圏（アザリ）索のくるをたれられざる

一をほそさる　わけさるや　一大かたし　さ　大様なる心

一をちくちう　百（ヲ）千（チノカヘ）夂　一をぼろけるまず　不（ス）二知（シラ）

わ

一わうちく　河　無（マ）別（ワリ）　日本記　無破（ワリ）

一わづらうく　煩発元（ハツラフハツキ）　一わざされ　わさか度下（ドウカ）也

一われられし　さ　これは我（われ）はそいあしめうと無ごう心也

一わざ　受（ワザ）也　一わざん　伊弉諾（イザナギ）　伊弉冊（イザナミ）尊　十三ノ三

のれ時、令作出給と云ふ。諸楽器の寵上に重定也。あつさ琴、あつまごとくもいふ也。鴨長明記云、和琴ハ元ハ弓六ヶ張を引並て用けるを、後に琴に作らるとや

一わろうめるを 哥の早下也 一わろハやミ 瘋病 痞日て 世俗になくるをといへるこれあるを

一わんとをるを 王家無等倫王孫にて、姓を不賜平人也

一わら方へいまやう 命婦まいりたる時、休息する局にや

一わきもれハ 幼者歌不蔽老者躰無温悲端与寒に氣併入鼻中辛どあるを言てのなくら

一われのれくしなり 山洋式河海花鳥委略て 御門吾に入たる様をとりて、秋王の額にさしまして、家の方にとと

ひき給ちと、仰ありあるとこゝろ

一 わるくしぎ海にうしのべて　おほやけにハつうまつらずし
て、源と来舎（サンクイ）といふれてハされ心也、若蟄居（チツキヨ）をう人の、ゆゑ人出あ
まくとバ、うしとのすと云也、古のおとゞ致仕（チジ）の表（ヒヨウ）なりて、隠（サン）
居（キヨ）のうしとよろぶしけるうしに父あるくといふれん、もれ
ずしとはぐゝう心也

一 わるぐらしに　まらぐ海ハ海（ウミ）乃
恐名（サウニヤウ）也、若為一本にハしつゝうしにれとあらしあるへうしにれハ拙心
ちづむ心也、蛭子（ヒルコ）の足（アシ）ふるぬハ三とせにたりるや

一 わくしにまくしにむさられ心、志ほるゝぬ海とハ、うらめちるさ
と云心をよめる

一 われしにそんしをぐしを
家にともむき給ちとのあて、別（ワカレ）の猶（クシ）と持（サシ）給也、それにうら

つけて、紙やうるけき中にしぬふされ心也

一わらうてうるかに　一ことハ家へとまむきなふなとのなひしるや、くらて抱ハいまぞうるしきとハ、それ詞も税云(シウゲン)ちるもしるまちれどもとれ心也

一わらハあをに柳のうきしろぐい、うきねのあらめ　花　あをにれうきハ柳のうきし紅梅(コウハイ)うきねのあらめときくろや

一わらハ青女に手青女(あをいろ)ハくらやて紫(ムラサキ)にあくさしろ女(白)也

一わらくにも　本朝(ホンテウ)には延喜聖(エンギセイ)代の時、菅家(カンケ)を左遷(サセン)ちうるまちど紙いくり、糺てあらそ

一わらハけて　花　童気(ハラハゲ)也、おさらげちうされ心

一王女れにて　王女れにて、王孫(ソン)を云也、朱雀院皇女昌子内親(ノクハウ)(シヤウシ)(ナイシン)王令泉院(ハレイセイ)女れ、世以稱(テフ)王女れ(ト)云々、凡(キヨソ)王女れにかぎらず、姓(シヤウ)とも

昔ハしひ付や荻女れちどゝみる　一われすいちうのと不ましやま
ひきるへき　有五家髓髓又濱成或ニハ奉七病喜撰式ニ
ハ出四病孫姫髓有八病是等也
一わるかつきわるかりて　かつけわるとて内蔵寮よりまゐる内侍
蔵人ハ東階の上にのて持むかへて哥頃以下舞童以上給　下略
前時勅給なれバ不詳これハ六条院にてのまや綿なゞわる
かれ用ゑ如べし机にわるとつゝて垂を袋持すゝして一十
百千万とかゝへて袋にのてまゐひて給鴨と云哥をかゝひて
まゐつるとゝろ
一わりしやうとつふかく　皇麞平調也　一わりかゝ　いの髪也
一わして又ゑらし　四月天気和且清緑槐陰合洲堤平　白氏文集

一 ワらくにまとやるる心なり。和の字や

一 ワやとれ 苡の文こさハゆらの心や。其れ名称とハ大変のるれ

一 ワれまいら給 蓍の前日子日や。新例多さ。源氏のれ蓍を若

葉まて統給や。十二行若葉。七行若葉 河海委

一 ワ葉さす もとれ岩ねとハ源を親まてそこら給ひし所なれバ。くとあり。小松もれ子ゆゑもつれしされる心や

一 ワかれあつもれ 羹

一 ワうけつきて 王気付や 手

源のれ横行まハあれどもや

一 我世のれ 二手室れの心や

一 われのもや 我を知ゑるゝ御てとけゆるハ。夕ぎられ名まで

ゑるさんとやぬれそふ袖ハ。拍と夕とれるるべし

一 わけゆん かくしん事を為をとうけまして。ぬれきね

とけんとやとちるも

一ひるおほひたるさく　菊の葉

と葉にあてじと、葉の多くにひるとそめてさくれ葉におほふや後

撰秋下哥詞出ありしるも

一われもかう　武藏聖にも見る

一ひる心もあらぬ　蓮へ嫡女とも荷傳ひしるれ相違とも也

一ひるられ　綿にて花と作てかぎしに用ゆ

一ひさられ　しらしろし　嫁娶にてゝらくしてとれ心也

一ひるまれ　寝と根とねるや

一志葉おもして　小堂栽萱葉

一ひるもん　食れるや　椀飯也

一ひるまといふもの　あつまは翠を朱にしせらるも　秋妻と出

ゆへあり

一われひぐん　唯識論曰

云何無慙不顧自法輕拒賢善為性能障礙慙生長惡

行為業河無慚法師或懺愧也

一われかくて　月の中にあらずくて粮と可心得

一わけなり　無妖氣　源語抄

一わらぬ　急産也

一わろもれ　虚俗うつゝ也

か

一更衣　四位　給女の想名也　此門の此服をめしかゝる時あり、ひめふ人なりまゝなりて更衣といふなり

一かんだちめ　公卿也　たゞ大臣なども此子を云なり　月卿

といふも　公卿也

一かしつき　寵愛する心也　寵

の字也　又冊

一かしこきれかげ　ハ　可畏

うく神　日本紀　恐心也　れかげハ天子此れ勢也

一かきらとて いまはしきとハ生(ヤイ)れ字也。命(サンチ)をいきるきと
の心也
一かくなぐらともくも禁中(キンチウ)にて
文衣のともくもなくんとかくんもんとや
一かくじけるき しられといふも同心也。なきれある心也
一かくしつ 隠(カクレツ)名
一かくくるに 頑(クハン)
一かぐと かくつけぐとや。亦まらりてかりるべきれ。揩(カコト)ちらいをく
心也。誑(カコト)うしむる心也。サ事(カコト)いきくかるる心也
一かくみ 河 記念(カタミ) 様仙 信(カタミ) 文集
一かくらうもやと文衣のくるに大なる人に送(ヲク)りたれど。弟(モン)
又のすをとて。紙(ノコ)しらう用ををいへり
一かんざし 金釵(カンザシ)
一かくりくいし 無風情(ナレフセイ)

一かんくん　勘(カンガヘ)やうゞん日。くん〳〵とあらはしらん〳〵をむべし

一かくやくひのまき　一条院の御時。上東門院の御入内(ジユダイ)ありて。藤(フヂ)

壺(ツボ)にまします折から。栄花(エイグハ)物語にある。当代(タウダイ)の記(カキ)

こゝらの此物語に多(オホ)し　一かくのみ待(ツき)　誓(セツ)ぐあれども

綴(ツヾリ)物語にかくのみねと云あるそれ人くさかなると多くての也

さ光源氏とかくのみ待と同時代(ドウジダイ)にはあれども此栄威

寛(ユリ)おもきてうけりや。寛まで此一巻の序(ジヨ)也

一かくし　頑(カタクハ)　一かくし　片方(カタカド)　片廉(カタカド)

一かつらひうけ玉ふ心也　一かづらかるさかやかるゝ心也

一かくうかくる　上(ジヤウ)の上とうらかるゝと

一かくれざりあれども也　一かくれよる　夕顔(ユフガホ)まで

一かやりうくずりやくハちづつ心や、もちりやうぬとや
一かとあきにもあしきで　一かどあるや
一からうして　辛(カラキ)や　一かれうこゑ　あはずしぬ声
よ月めくらう心や　一かうらん　欄干(ランカン)や　おぼし海
ともいへも　一かすかしね　此家の安首宅ぞとく

あまよみらへようも、中川のこちよ波とひのふとや　此遊所よ
よくきこえし語りも、それ京よ、美濃(ミノ)信濃(シナノ)安國の壊(サカヒ)をなし名有(アルメイ)所
や、その森(モリ)のあ代、さよくうかされバ、箒(ハハ)木(キ)代てくゆやう
まで、近くこれがそれよ似くうあるもあし　絶ハなき事よ、有(アリ)
さはらであるぬとあるも、箒木ハ人丸(ヒトマル)の哥始(ハジメ)也

人丸集
播みこあれとえうつけすきずれまた代まとえうもききう人ぞえ給

一かいまゝ（うつきゝ）　埴（カイマ）居（ミ）　物ごしゝ　かれかまこゝるゝせ　かいまゝと云也

一かいまゝ　且（カツ）や　くゝと云所もあるも　所によるべし

一かどいまゝ（タイヤ）　とみのやうなる　今も門をあげおろしする　小家（ニソヘ）

のさ後也

一かさ代なき後どもして

中門（ちうもん）のかぎ後べし

一かさかなりとぐる毎　片帆（カタホ）

真帆（マホ）といふ詞よろいでこゝろや　くゝはねあしきゝ也

一かづらきれ神　大工（タイク）をさしてかしぎれ神と云也　此神橋（ハシ）

をかけおふゆへなるを

一かべのなりれこさるゝもく　茲

毛詩（モウシ）七月（ノ）篇（ヘンニ）云　八月在宇（ノキニ）　九月在戸（ユニ）　十月蟋蟀（シツソツ）入我（ルワカ）

床下（ユカノモトニ）

一かこうに　囲やうゝや　れ心

一かれ　粥（カユ）　貴人（キ）　事物（サウテウ）よまいるもれなり

一 神聿（ゑゐき） 九月ハ朔日よりも内裏（ゑゐ）の神ゞすや。三十ケ日ハ
織（ケヒ）にふれ給ふよりも。来内（サンダイ）叶（カナフ）まじきとや

一 かゝるもゆへる　うらけるうらなどいふすゝ。それよりて
といふや。又うくあるけるにうらけるなどいふ事もあるべし

一 かち（ワシしきこれ）かち（ヂ）かち（シ）ハ真言（ゴン）教（ケウ）の陀羅尼（ダラニ）の力（チカラ）や

一 海龍（ハイ）王（アラワ）の后（きさいき）龍王（リウワウ）の妻（メ）なれバ后（キサキ）といふん勿論（モチロン）や　昔（ヘン）
大音王（メイカウワウ）といふ王。こゝめうけうしき女紙ならうけれを。遠
國（ゴク）の王。四人ともこれをえんすをのぞこけるゝ程にこの
女紙（ニヨカ）ようをぬ。ちゝの王ともちゝどこひもとむる事にいぬいの
うゝにあらうて。廿七万八千九百里をゐて。まうぐうかい
あるゝ。その龍（リウワウ）をこれをとりて。大海（メイカイ）のうこゝにをけること

と字ハ事。父の王ありしひは。遠國の四人の王をは。行むりひて
とりあしらるゝ事。吉祥天女の本縁に申侍り。又安竭
所龍王の八歳の女の妻を王の妻なれば。后といはんに
相違なく侍り　一かしれうつくしくそゞれたる
昔は尼と云を。髪をばそしでゝるのよりとしたるといへり
一かほはあくすりなして　なきなりて。かほのあくぬらるや
一かんざし　おさな紀時はかんざしをもきねどもうこあけ
しらしぐうけしうるべきといふころや
一やうなる人のしるし　大徳のかねなどして。しるし
なきは世の罪も心いたきなるべて来たるされ心や
一かのもぐこゑんぐは　前は尼君に源氏のゆるなど。此世は

のしたると。源類(ソウヅ)のくちゐひしことを云也

一かのもりなを　源の小柴(コシバ)まて　ゆるのふ尼(アマ)君(キミ)れうるをいうで
きくのへると。尼君のふしんしのゆゑ也

一かの色のひるけん　紫の御母のうへ

一かうやう　うやうと云心也　一かずまへ　源氏のさひ人の数(カヌ)
まちしのへとや。かずまへハうずと云心也

一十月　うゑづきとよむ　一かりきぬすぐる　花内裏より
もろともに退出(タイシュツ)の時。うわさぬ深(スカタ)おぼつるし。いづくにても裳(サウ)
紫(ソウ)代あらるゝ給ふ　一かねつさて　さくまりかねつ
くといふよりて。うねつさて　どぢめんことしよりどぢむる
に口をとぢて抱いたぬをいふ也。かねつさて抱いたぬことも。

ハ諫(カウ)などの論議(ロンギ)の時、諍(シヨウギ)者(シヤ)、ねどいへば、威儀(イギ)師磬(ケイ)を
打ならす。其後ハ論議をやむるや。其心ハ通(ツウ)ずるなり

一かうしもひとしく　ちしゞきもそしゝ給ふぬや

一かうしのうつまだしも　うち場(バ)や。さゞかだ同事や。しもを体(ヤスメ)
字(ジ)や

一かゝるぞ　人なきまされ心や

一かゝおひ　おさなきれ人のうちなりなるさ海や

一迦陵嚬伽(かみらのか)　聖主(シヤウジユ)天中天。伽陵嚬(カレウビン)伽(ガノ)聲(ユエ)。法華經(ニ)伽陵嚬
伽在声(コエニ)勝(マサリ)衆(シユ)鳥(テウニ)云々或迦樓(ヒヤカロウ)賓(ヒン)或云(ハノリ)伽陵嚬者梵語(ボンゴ)や。伽
陵ハいこの中より鳴(ナク)とや

一神などを見よめでいぐき
大鏡云(カミニ)。いうじう侍しことにやうて同君延喜(エンキ)の大井乃引(ギヤウ)
筆(ガウ)に富小路(トミノコチ)の御息所(ミヤスドコロ)の御腹(ハラ)の親王(シンワ)の七歳(サイ)りて。舞(モヒ)まゝ

させぬくりしぢぢらのすとそなく侍しか万人しは
これぬ人ハ侍らざらされかたちひかるやうまうつくしき
けうしをぬひしうぢ山の神(カミ)ぬでゝとなきけり
一かいしろ　舞(ブ)臺(タイ)を垣(カキ)のやうに立ぬぐうことをいふや垣(カイ)
代(シロ)や鬘(ケイゴ)図や四十人のかいしろ　も(ナガ)私(トキキヤウノフエノフニ)笛譜云四十人乃内
有(ニ)序(ジヤ)二人破(ハ)二人垣代三十六人云々此物語にもれたるぞ
といふに必しもよせなさのこや輪(リン)臺(ダイ)の輪(ワ)作(ヅクリ)とて舞(フ)臺(タイン)
よに丸立(マルクタチ)めぐるや
一かざしのもみち　舞(マヒ)のうざ
しにハまことの立木ハ枝(エダ)ともおもひ又ぬくり花をもうざすや
ちり透(スキ)うとあれぞこれハ常ハ紅葉(モミヂ)なるべし
一かんぐちめうちいこれ　これ官(クハン)をすゝむといへり

一かきあはせ　調子をとゝのふる事をいふ

一かはほり　蝙蝠をもて扇を作りけるや。常の扇也。俗に扇の異名也。捨扇ありあふぎ

一がくきうのあまさん　妻家にはいらくきう。親行なるも。文君などいひぢんらる。東説にも卿なり也。鄂州の女のこと。女なり。楽天の子しるすを云也。又文君は卓文君。白頭吟と云。歌をよみてあれば。司馬相如これを見て哀とおもひける也

一かくれなき抱と　うすき心とは。浅き心と也

一かくなどいふさくらにもはかず　花の宴にはこれ始ならまして。舞楽あり。村上天暦三年三月十一日。二条院花宴　陽成院幸也　同月十二日。内裏仁寿殿花宴。各有賦。東郎奏春鶯囀之文

地下伶人ぞうりまて殿上の舞ハなきや此物語のなるひ面
乳もあれは。おゐよるもおとくりきなしたるや

一かうじもえよろやら寸 侍師や 秀逸なりと毎句より感
じてよろやらず。誦しのしたるといへるれ

一かうしふべきやぐら 苔つぶれ心しり。且令嫁ゲ戸や

一かぎこ かしきぬなもをこさりハ。下仕までもこうるなり。かぎこ
ハ上﨟のきろや。汗衣上に羞すり物なるを

一かうけ 豪家や かんもんがわすりとふ心也

一かうのぎいぎんより殿上のそうなどれする事
花 このゝ身上の難儀や。読抄なれ物ならず。えうるれ也
いぎんといふハ一員とも名付るや。近衛の物監将曹府生を。

一人づゝにさだめめしくはへてつき人をいふ也。職に
よりて随身をたまはる事はかぎりありて。出仕のともにめしつれ
るめしぐする也。されば時によりてもちゐられて一人づゝめしつるゝ
もあり。されば随身とぞいふ也。攝政納言大將中將ハ左右に
へ右の番長一人を請ひ人すべて六人の随身をゆるされ
てめしぐする也。そのうへ拝賀なれば時も。將監將曹
府生を又一人づゝ具する也。一員ともうけれ随身ともいふ也
いづれもこれ地下のことく也。蔵人のそうどハ殿上の蔵
人の將監をいふ。これを一員にぐするをハ衛府あるまじき也。
又行幸の時ハ左右とも將監將曹ハ本陣に供奉するによりて。
これハ一員にめしつるゝ事もあるまじき也。又一

明のこと葉(バ)心得がたく記す也。別にある代さるべし

再口傳云。此物語の寓言(グワゲン)し神と心得べし。源氏大事をは

めんとあるに此書(カキ)しるるべし。猿閣(ゼンカシゴセツ)の説

一かしこきかしこ　つぎ却り中へ髪(カミ)とこれ入也

一かさしける心ぞ　八十氏(ヤソウジ)ぐらは。おもふ此人にあひぬる人

とこしなへ　後撰(ゴセン)　第四。賀茂条の日拙見とあるに似たり

引哥別にあり

一かうごのまゝ　髪上の時沈(ヂン)ならず入れ也

一かうくしう　神(カウくシキ)髪也

一かんづき　神(カミ)同(ツカサ)也

一かうきハ　さるしの板(スギ)こハ。鶏(タツ子)ぬぐきさるしまるきこれ心也

一かうしぬそれもしへ　秋宮(サイクワノクン)群行の日ハ。祀(ニシヾ)河まで此襟(ハラヒ)のこと

あり。幄(ヘク)の座にて中(ナカ)臣(トミ)の麻(ヌサ)をまゐらすあり也

一かけまくもかしこ紀おまくにとて 宣(セン)命(ミヤウ)の初 掛(カケマクモカシコキ)畏

一かもれいつきにはそんのうれ御給ひ 孫(ソンワウ)王そもうこよひべし

孫王為秋院(トレイシン)例 真子(ナイシン)内親王(ワウ) 文徳孫王中務卿 惟彦親王女 仁和(ミワ)五年 卜定(ホクチヤウ)孫王、

例此一夜ハ仍(ヨツテ)おほくもあらざりけらこ云也 祝(ナウ)花鳥ニ来シ

一かけまくも 秋おもひゆるとハ昔おぼゆる心也 おさがかなりの給

ひしるまであれバ也

一かへさひ 辞(ジ)退(タイ)也

一かろめろうぜらるゝ 軽呼(カロメロウ) 嘲呼(タウロウ)せらるゝ也

一かゝらの星 天稚(アメワカ)彦門(ヒコ)之湯津(ユヅ)楓樹(カツラノキ) 旧夏本記

一かゝらよく 河楚屈原(ソククツゲン)をまゐられしまをいふ紀 仍屈原(タシクツゲン)にかゝらしめ

こうへくらず

一かどりのれる代し 河縑直(カトリノチヨシ)家

絹をうらるゝと續絶(ヨミ)とこゝめこ續(ヨミ)也。絹ハ是も平絹の出衣也
白襲(シラカサネ)のうらるゝもうすき絹(キヌ)也

一かんの志人ゆゑ　呼　抱ゆゑ月も出仕(シユツシ)をとゞめさせ給ふ也

一かぢ此をとる　鴈檜(ガンロ)こゝて。鴈(カリ)の声(コヱ)をかしらるゝまゝ女どへたり。
かぢ此竜(ヲト)も同し

一かゝる抱何かゝる抱ハかづきしたる
抱や。或海津抱(カイツモノ)こゝ云ゝ　呼　貝(カイ)ちどちるへし。能周(ノフイン)か秀枝(ウタマクラ)ゝかゝる抱
うかをバ。あさりこゝ云

一風ゆゑあらうてハいぶへぬ　胡馬嘶(コバイヒ)小
風越島(ニユツテウスクフ)巣南枝(シニ)　馬ハりと胡国(ココク)此歟(ケモノ)也。仍此風(テホリフウ)ゆゑあられど　旧皇(キウリ)なを
あらひていもゆゑ也

一かうしきうといふ手を　若廣凌(ヤウ)
散(サン)ハ琴(コト)の秘曲(ヒキヨク)なり。愁康(ケイカウ)か華陽(クハヤウ)の亭(テイ)なりて。秘へゆゑあひてつゝへたり
曲(キヨク)也。此秘人ハ昔此冷編(レイリン)の変化(ヘンゲ)也

一かすれゆゑ此行大綱云　織貞令(ヨクイン)

云。大納言二人云々。今の文のことくなるハ二人のかハりどとより
かなれバ権の字をくりかへきや。寛平遣戒の心也。三人乃うち
に権官あるべき心也。さるまれり官のかをゞいつ世も権乃字
をくりかへきにしたりて。源氏も権大納言といへれ也。中比ハ正一
人。権十人になれり
一かくる波につけて。送の人ぞ也
一かく人十づゝ　十列とハ。東遊の舞人十人なるに乗て。おをゞ
まと云地をきて。神社の行幸。関白の賀茂春日詣など
石具して。社内にて来子なるに舞て。其後馬場にて。馬を
ちすゆるまゝ。よれつゝハ右近の官人是をひとむ。八幡臨時
祭ならばハ。舞人雲客舞人なり。源氏の表位告ようでに
も。末人十列を具しかへるなるべし

かりられおもしぐれ此まいをまゐらびて 長徳二年八月九日御
堂殿 干時左大臣 辞左大臣同日以童六人為随身三年十月九
日勅賜左右を清府生各一人を清各三人為清方御停章
子云々今案ましは清方ゆゑゆゑてむらさきすそこれもゆひ
すりよしはみしられど それ袈裟の色不見なし 水干ゆゑべし
やかりきぬうるべしや 清方どいへど弓やなぐいをなしべきな
やいづれもうしなり 沈捜をこゝ侍らず 此堂殿は六人とこそしらね
これは十人とあり 又融公童清方給ふ 國史なるべきもし
なきず されどもめしなる 往きねまもなるべし 此物語は書は即
沈捜なるべし 一孫此説 一からもりもてやのさじ 唐守
蘋姑射刀自 荘子 蘋姑射山 いづれも古物語也

一かさつんかるかし　かつん方なるべし此時分明石此巻の冬也
一かんやがらにしられたる紙だいして呼じいして張たるや紙屋の人
抑て色紙すきて出てさや。これさハ唐綺也これらすき也
一かたちハながりすまうて　紙をつぎてあそれバさぬのやうにも
あすくらけうじくそや。背ハ絹ま多ずあしや上の綸ま中網云
もてハ心をとらす。此比世まはくぶおもしろき紙共をそらのふとあ
れば。からき共ハうるさき後の物共をとるや。指遣弥九词云慈義云紙共
まあをと馬ひけり前とぞ　一松がいるゝ　俗まさくとこん。
とあるや四圍なる　一かくまことくさとすあるを
呼　嵯峨堂して絵をむやうにまうりつくごの絵まや。文桂院殿
此すゐるしとこゆるや　一めもかれぞ　池戸えて土九坊

一 今云也。無位れ衣袈裟也

一 わらじなどをぞる 中茅云。柯子

一 かどひろげきをのひて 畔 秋好

元素云

のさいまいまて。源氏の一門も繁昌をん時とも

一 神さびにける年月のちう 源の久志き遠義の方を云。神閑。又

神宮。上久志つが成心也。又久成心也 一 神いざなとさまり 落雲うく

れ給。桃園家なども我によりてや

一 かきつめて 雪もよは。雪の夜也

一 かつらの下風 祭の具に。桂いりによりて志也

一 かけきやはうけきやはとは。せひかけきやはとや。紫茂の山襖にて

はなくて。除服のこそぞをんとはとや。荻。渕にそへたり

一 風のちらけぐしすくなし 文選 豪士賦序落葉俟微風

一 隕(テツウ)而風力蓋寡(ケタシスクナシ)・風力力(チカラ)ハ門大臣無心中元贄(ジテク)をねバ不成(ナラ)とまや・
今ハあるまとしても源氏のちからつらきと云心なるべし・おとさん
なり不可成となり
一 風の吉凶行ハ風生行(ナル)與宗(ヨソウ)
間臥(カニ)月照(フセリ)私時(テラスヲトキ)臺上行(ニユク)朗
一 かけていへバかけていへバ・いひか
くれハや・蘿(サガリコケ)のうづら紙・日かけとよめる・日かけ此いとをかぎし
まして舞や・袖まとけしもハ源ハ遊(あひ)しこと紙よめる
一 かいほりまさぬなどきそ河 搔練(カイヨリ)ハ紅(クレナヰ)のうすき名也・かいねり
のもまさぬ着(キ)てと云べき紙略(リヤク)しかり 若搔練(カイヨリ)ハうすき紅乃
さぬのねりたりしかるを云・ね中びらうとハ小袖(ソデ)を云まや・絹(キヌ)など
きそいうへも薄(ウス)ぎぬをどぞ着(キ)こうべし
一 かへり戸 賽(サイ)
一 かへりとうぶやうこれとく

しき　唐東京錦（カラノイトウ ギヤウキン）　日本にも有て唐の錦（ニシキ）は上品（ボン）也　若　今案
白地錦（シラジノ）を東京錦と云へる也　一かきねのうちきなど　哥うち
きは打たるきぬやひとへと云抱はきねの下に必着（カセラスヰル）やうさねとも又
きぬなどあまたかさぬるなり也　一かたれる　舞（マヒ）の袖うへを拝也
一かうごしは世ちなれたる若　今案　高巾（カウゴ）子冠（シノカフリ）はこしを高（タカク）出たる
ふる白きに絹（キヌ）にて是をとる　舞人所ゟ是をとるしなふ　六位舞
人のうち是を着（チヤク）せて　かうごしきる抱は錦のおもてをかうふるよしを
きたる　是をこゝろなれぬ姿（スカタ）なるよりて　せざるなれたるとはいへり
一風（こゝふ）ふけは波の音さへ　蜻蛉（カケロフ）日記云　石山に来て夜とて　いりぐさ紀
山嶋（ヤマブキ）の崎（サキ）など云所をとゝやまて　おしれ中よりこき絵なるが云　こゝ絵を
近江の名所ぬべし　一かめれうへの山も　不見（三）蓬（ホウ）至（ライヲ）

不敢皈童男童女舟中老文集

一かくりこゑは　喜春禾呂也反音ハ呂より律ようつるを云也

喜春禾ハ黄鐘調の禾也平調にもつかして用ゐるや亡葛俗黄

鐘調も律也呼くりこゑ律の呂にあるにや呂律次第

一かるかしふしあくり　ぢさまねぬ神也

一かくしやく　大月をこゑ也　一風の者秋にあるぬと　秋風禾

の心也平調乱次羽盤渉とする

一かぢさくら　かぢ様ハ花の名ゑうす紅にて就更艶あり花也古今

まかりハ様とする　これなり　一かくし紀いたはもおもしろ　日

本紀第一云天照太神踏堅庭而陷殿若沫雪以蹙散　今案

りるに若ハ字とあるべきにや　そこれをれとしとれ悪行を史照太神

のいつかなくる時まずしまのけきをし給ていきおひをなし給時なるも今
を江志と弁(ジノ)小将をとしいなれば江志のりこうちろをとるへいくる也
一かけくしき 魚(カケ)也
一かんの志 内侍督(ナイシノカミ)にまつり給ふ
宴(コ)に和でも安巻のるに如べし
一かうしや 雑(土ギ)浅也と此給心
一かずなるばいとひや 九月をば世俗(セソク)に輝(ハガル)て也 十月にハ内まいり
とさぶめられられば九月ばかりに命をかくるとしくら
一かの渕ハよぎ居まりなる後 家和(サイシヨ)に嫁合(カカウ)の男(オトコカナラスノ)必此川を引こす
と云ふ深ノ玉とおきをとけるに也 くるハこねだハ密通(ミツツウ)の由(ヨシ)也
一かるのやうにて 父子(フシ)と云 形(カタバカリ)也
一かりの子の 鴨子(カモノコ)かもをかうとも
一かえう 荷葉(カヨウハチツ)夜の薬(タキモノ)也 蕊ハ梅(バイ)
一かすみぶる月と云 月星を霜(カスニ)
花秋ハ菊(キク)侍(ジジウ)後冬ハ雲岩(クロバウ)

へだてどいハ島もなんと如べし。よこ笛を感じていへり

一かんなのこ　假名手本（カナデホン）何時始起て何人（ハジメヲコリ）不詳（ナンヒトノ）無不見（ツヲル）往古（ミル）和訓（ワゴ）

ハ万葉日本紀の哥の様也

一かうさく（有のうちハ）なかるる詞也。還迹けうさく恩

かきしても　菓の名ハあかひを云　杉植（オルカツラ）ハ夕陽の事也　文章生（モンジヤウ・シヤウ）

にてあかしをいへり。梲植（ナラケイリン）林一枝（コシ）巣山（ソシ）片玉（ノ）今以課試（クハシ）及第（キウ）（タイノ）

変化来（ルハ）葉風（カセ）うつるの葉（ハ）の風也。博士（ハカセ）にそへるなり也

一神無月の廿日あまりの頃どに。六条院に行幸する　康保（カウホ）二年

十月廿三日。村上（ムラカミ）天皇行幸（キヤウカウス）来雀院（ニ）此例（ノレイ）をうけして出る

かえ殿（君上）　哥　栢殿（カエトノハ）　来雀院にする。漢武帝（カンノブ）栢梁殿（ハクリヤウデン）にあるごとく

まや。東宮（トウクウノ）にあるや

一かさしのぶいつくり茶をして

一かくさり　哥　沼をくくらう

一 賀皇恩 何 延喜六年月十六年此賀此ハ賀皇恩万歳ニ云々
よし此記ニ云々云々
一 かゝ弓 歩弓也 中将女将とねりどもにぬきすゝ也
一 かけ物とも 勝負のかけ物也
一 かゝぬきて かゝぬきてと云
白社ノ系の時のすゝ也
一 かんぐらゝ 神寶也
弟の名也かゝぬきし此云也
一 かきくしゝるね 弟の系一口ゝり引てさて返手ニ取りすれ也
一 かゝすひかゝきもれもとゝろゝびよりゝ 琴此渡ニまゝ室にあづかり世
にゆゝさるゝぐひ習きとも
一 かしこまりゝ 綾葱ちゝ子細
と云知らしと云心也
一 かしゝまゝ 栗ゝ此神とハ右系ゝ
後此すをとり 柏木に栗ゝ此神をとゝちゝゝ引哥別銭にあり

一かれこもんのこうまたい　唐織抽の小紋也

一かんこうち　吉日ならず

一かうともちれおりハ　諫説也

一かすれ神の　合義とて春日ことも伊勢おりします。いせ春日ならり君臣の
物ことや。中宮ハ必藤氏なりと。秋好の中宮先。古殿仕の皆ニ御定なひしとも

一かりぶえ　うそ笛也

一かるこうハ　踏奇れ奇功ハ切者れする役也

一かきあわきて　抽を昇にハあらず。

一かつれかげにもづつにハあらずや

一かつれかげにもづつるれあるし

ゑるゑるあわく神也

蒼人が将院にてハ別にしゝ。かつれかげにもづつるれあるし

とこしとも。ひげ黒の姫黒の簾中にてこ給しゆへ也

一かんおもやう　こしらんなれなど。宮々のすを云抽也

一かんすいくく　酔醉ニ来ハ太ニ来也。舟ニ来ハ其例あるにや。村上ハ

記應和元年閏三月十一日夜ノ宴舟ノ禾蓼ニ酣醉禾舞人四人云々

文河水禾と云説あり

一かぎしあり　うさしありとこ作も。

こゝろへのこゝあるあらじ。茶の沢ハ此とひゐふとなるべし

一かせうとて　風心うとの心也

一かづらひげ　鬘髯おもづらひげ也

一かぎしを　去ゝ此去おなじ　かぎしをおりてとゝしこれ事也

一かぎしなどあらふ　除服也

一かべの中にさらぐ　壁のつら

まうくれあふすを云也。遶壁暗蓑無限思遠巣寒燕未能飯禾天

一かいせんらく　海青禾　水邊のなや

一かきくもり　花明ハ日蔭のうづらをうつるまゝ。山ごもりなれば。

日かげをうけぬとや

一かうへ　勘尚也

一かこの町　二此町ハ對して也

一がやぐ　うしまし也

一かゞ鳥　姉家は郷のならいもんなめやうく郷の鳥とや声
りとハおふて抱云夜とれ心え　一かうまん(あつまや)ねし　庚申
一かこゝまちるかゞみん　中君も抱やひ文うさ舟もやちりがみんと
やぐらこハさがいや　一かうおとかれ　おとう腹のみとも
世のみるひとや　一かしけゝう　れやまうら心や
一かのうずし三紙　若者入ノ婆是菜豆并おゝイボ飴信義讃
者是人現生口中常出青蓮花香身毛孔中出牛頭栴檀香
法華経　一がまれきう　降魔相不動着
念慾のねをあつりしろ心や　一かさゝざ(うさ舟)　鵲や宿りて谷と
こしらか　二かきくし　天雲　雨雲　何んそ
も消まてゝきとれ心え　一かくし紀やうりやう　出雲守

はをこさせたり。俗髪(タシカミ)を

一かしられ(まなるひ)くこあらば 法しれ(ゆえ)

ぬ此いへり髪(カミ)の毛(ケ)あらば男れげ立(ダチ)りしらもふとりぬり心ちをんとや

一神など 神分(シンフン)は心經(シンキヤウ)よむなるべし

一かざりそと 一生男(シヤウガイ)ぬ此

一風のまざれ 地獄(ヂヨク)の不のほを

風のまざれと云々

一かれて 不離(スカレ)や

一かくさう 学生(ガクシヤウ)や

一かうじ 大やけれ勘(カウジ)ゝ

一かせ(のりぎ)こうげに思ほもふきちげけべよ 勘尚(カンダウン)

歴石伐木(ウコカミ)梢殺林莽(ヲウチコロスリンボヲ)

文選(モンセン)宋玉風賦(ソウキヨクカカセソフニ)曰

69038
6AP73